

ぶどうの木

第 39 号 (2014 年 9 月発行)

「ぶどうの木」 第三十九号 目次

巻頭言

信仰告白

受洗、一年後の感謝

救いから受洗までの記

義兄の召天

あまね兄の召天

緊急入院を通して

信仰と病

ひとりごと —— 神様への手紙 ——

五七五

母の祈り

患者待合室

信仰雑感(七)

信仰雑感(八)

オランダ・ベルギー・フランス旅行

伝道師任命式における証し

八幡前田教会年表 二〇一〇年～二〇一三年

編集後記

榎本和義牧師	宇戸田一郎	原田日登美	植木賢一	正野真宏	林由記	河本米子	正野百合子	井田れい子	伊規須太	野村仰一	長田正幸	首藤正	首藤正	正野真宏	隈上望都	
1	3	5	7	14	20	23	25	27	30	30	32	34	43	51	60	67

八幡前田教会
基督伝道隊
福岡大濠公園教会
戸畑教会

巻 頭 言

榎 本 和 義 牧 師

「わが義人は、信仰によって生きる。」

もし信仰を捨てるなら、

わたしのたましいはこれを喜ばない」。ヘブル十章三八節

一六九一年、信仰によって生きた、ブラザー・ローレンスと言う修道士が亡くなりました。彼の死後、生前の談話や書簡をまとめた本が「敬虔な生涯」と題して出版されました。それは十いくつかの短い書簡を含めたささやかな本に過ぎません。そこには彼自身が実践した信仰に生きる生き方の具体的適用が簡潔に記されています。

私はこの本から多くの示唆を与えられましたが、格別印象に残るのは、単純素朴に聖書の言葉を信じ、それを日々の生活のなかで常に覚えて、小さなことから大きなことまでどんなことにもみことばとの対話を通して、主の臨在のうちにいきることを努めた姿です。このような生き方、信仰が机上のものとしてではなく、実際の生活に根差したものとなること、

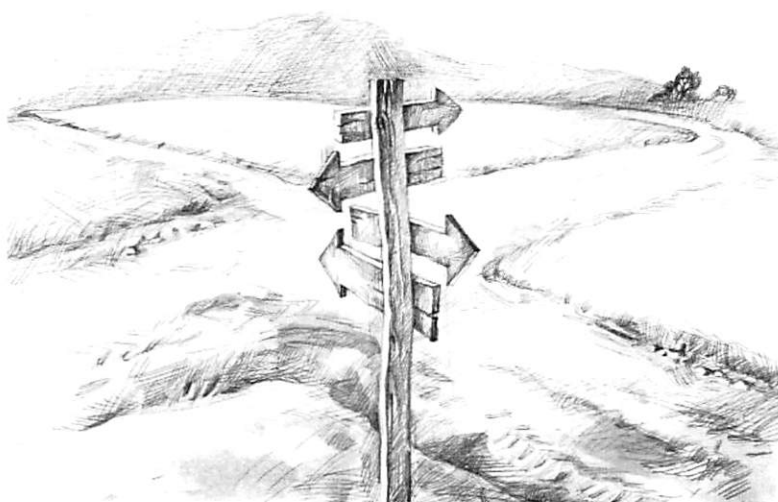
これが救われた者の恵みではないでしょうか。

遅くなりましたが、今年も信仰の歩みをまとめて「ぶどうの木」三九号を発行することになりました。ここにもローレンスのように信仰に生きる者の喜びや失望、信仰の戦いなど、日常生活で主と共に生きようとする姿が語られています。主のみ心を一人一人の生活、また人生の土台として生きる。これが「信仰によって生きる」敬虔な生涯です。ここにまとめられたものはそのことの証言です。これらのあかしを通して、信仰によって生きる恵みを味わってください。

「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つ、走ろうではないか」（ヘブル十二章二節）と勧められているように、まだ未完成ではありますが、「あなたがたのうちに良いわざを始められたかが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している」（ピリピ一章六節）とありますから、上を目指してそれぞれ信仰によって生きる日々を送りたいと願います。

次の機会には、是非、あなたも信仰に生きたあかしを語ってください。それによって魂は成長し、主の祝福と栄光にあずかることができるからです。寄稿してください方々に感

謝するとともに、読者の皆さんに主の恵みがありますよう祈りつつ、この小冊子をお届けします。



信仰告白

宇 戸 田 一 郎 (前田)

天のお父様、今日私のような罪人をここに導いてくださり感謝の気持ちで一杯です。

私の実家は宮崎県最北端で、大分県との県境に有る小さな漁村で、今でも漁業を営んでいます。家には物心ついた時から仏壇が置いてあり、床の間には天照大御神の掛軸が飾ってあり、かつ漁師の氏神様が祀られていました。四人兄弟の末っ子で、決して裕福では無いものの何の不自由もなく幼少期を過ごしました。イエス・キリストは中学校の歴史の教科書で学んだだけ、教会は修学旅行で行った長崎の大浦天主堂を見ただけで、キリストとは全く無縁の環境下で育ちました。

中学校までを実家で過ごし、金生一郎先生がご奉仕されている都城にある専門学校で五年間の学生生活を送り、一九八〇年三月卒業と同時に北九州市にある企業に就職しました。そこで女房と出会い、三年後結婚、その後二人の娘を授かりました。仕事内容にも恵まれ、企業戦士として、一生懸命寝

る間も惜しむかのように働きました。その甲斐あって、順調に昇進し、より責任のある仕事を任されるようになり更に仕事に精進するようになりました。

ちょうど四十才の二〇〇〇年一月から五年半、インドネシアの合弁会社に駐在員として派遣されていました。初めの一年は単身赴任でしたが、その後家族全員やって来て一緒に海外生活を送りました。その後、間もなく女房は異国の地ジャカルタの教会で受洗を受け、私はただそれを肯定も否定もせず見守っていましたが、これがイエス・キリストとの出会いの一步となりました。

何処にでもいるごくごく平凡なサラリーマン、良き夫・よき父親・良き企業戦士という顔を持ちながら一方では、己の欲望のため、したいと思っていることを行い、好色、情欲、酔酒、遊興、宴会騒ぎなどにふけるもう一つの顔を持って、時に他人を深く傷つけ迷惑をかけていました。

帰国後は愛媛県松山市に単身赴任となり、北九州に帰省の度に前田教会に顔を出し、榎本、金生両先生の説教をお伺いし、以前よりは随分聖書に興味を持つようになりました。しかし、いづれインドか中国に再度海外赴任する可能性が高く、信仰より仕事優先と考えていました。また、己の欲望の為に生活もそのまま続いていた。

これから話すことは、今から考えると、全てを見ていた神様のお導きであつたと思えませんか。二〇一二年二月、それまで勤めていた会社を早期退職勧告、その直後脳梗塞で緊急入院。三一年間勤めた会社と健康を同時に奪われ、一時は放心状態になりました。しかし、そんな夫・父親失格の私ですが家族は暖かく迎えてくれました。退職三ヶ月後には、小さな会社ですが、日用の糧を得るための、仕事を見つけてくれました。その五ヶ月後、採用してくれた会社社長が「後のことを宜しく」と言い残し亡くなられ、何も分からないまま、無我夢中のうちに一年が経過し今日に至りました。正直日々大変ですが、神様から与えていただいた仕事と思えば乗り切れると確信しています。

今日のこの日を迎える事が出来るよう導いて下さった、榎本先生、金生先生、それと家内に感謝致します。

「罪の奴隷であつた時は、あなたがたは義については自由にふるまっていました。その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。罪から来る報酬は死です。し

かし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」（ローマ六・二十一―二三《新改訳》）

アーメン

二〇一四年一月二六日



受洗、一年後の感謝

原 田 日 登 美（大濠）

「一年の感謝会にて」

昨年十一月に受洗させていただいてから、約一年たちました。

最初の二、三ヶ月は、嬉しいどころか、自分のできない面ばかりが目につき、私自身も、家族の顔も罪の塊にしか見えず、とても苦しみました。でも、榎本先生から、できた事だけを感謝して祈ることを教えていただき、少しずつ落ち着いてきました。

一年前のこの席で、榎本先生に、一日の終わりに必ず感謝の祈りをしてからその日を締めくくることを教えていただき、一年間毎日実行できたことに感謝します。そのおかげで、朝目がさめると、すぐに神様を思い出し、忙しい家事をしながら、短い祈りをするようになりました。その事が一番の感謝です。

又、家族や周囲の人々、自分自身の問題について、どう行

動したらいいのかわからなく、不安に陥ったり、パニックになることも多くあります。夫婦喧嘩をした時、主人から「キリスト教は愛の宗教ではないのか」と非難され、すっかり落ち込んだこともありました。でも、自分自身のことさえ、ままならない弱い人間ですから、神様により頼む道しかないことを悟りました。

だから、「どうする事が神様のみむねであるのか悟らせてください。堅い信仰をお与えください」と毎日祈ります。それから、聖書やそれに関する書物等を読む時間を少しずつでも与えられ、感謝しております。

つい一ヶ月程前、榎本先生が、朝、心に強く感じたみ言葉を、ひとつだけ、一日中、生活の中で常に考え味わうようにしているとおっしゃったことが心に残り、毎日できるだけ実行しています。どう生きてゆけばいいかわからず、ゆらゆら揺れている私の心に指針が与えられました。暗記が苦手な私ですのに、み言葉が少しずつ頭に浮かんでくるようになります、感謝しております。

祈ることも信じることも、何もかも自分の力ではとうてい駄目で、神様によらなくては何もできないことを教えられました。

神様は一方的に私達を愛してくださっているという説教、またヤコブ書の、神はねたむほどに愛しているというみ言葉について、私はあまり実感が湧きませんでした。でも、先日の朝のメールメッセージで、黙示録の「あなたは初めの愛から離れてしまった」を読んでびっくりしました。

神様に失礼ですが、人間的に考えれば、まるで愛する人の心変わりを悲しまれているように感じられたからです。私の感じ方が変なのかもしれませんが、「神様から愛されている」という実感に、私も神様の愛にお応えしたいという気持ちで湧き、嬉しかったのです。

先日、金生先生の説教でブラザー・ローレンスの本を読んだというお話をお聞きました。

とても気になり、インターネットで探してみたところ、色々教えられました。

* 苦しみの中で神様と一緒にいる事、

* それがまさに安らぎであり心の平和であるということ。

* どんな些細な仕事をする時も、

* 一日じゅう祈りの中で生活すること、

* 日常の生活自体が祈りだということ、

* 神様を愛したかったら神様をいつも思うということ、

* 愛する人の事は、もっともっと知りたいのと同じように、やっぱり神様のことを、もっともっと知らねばならない、そうしなければ信頼もできないから。

神様がどんなお方であるのか、知りたい気持ちがとても大きくなり、聖書と本等を読み、教会に通うことがとても楽しいです。そうはいいながらも家に帰ると些細な事でいつの間にか不平不満が噴出してくる、とても弱い私です。

でも、神様を一生をかけて知りたいという心をつくつてくださった神様に深く感謝いたします。

そして……

♪ 新年聖会で心に残ったこと♪

忘れやすい私ですので、み言葉を記録する小さなメモ帳に次のことも書いておきました。

* まな板の鯉になるしかない！

* 過ぎ去った過去は忘れて祈る。

* 困難が押し寄せた時、まず自分の心と向き合い

神様が何を悟らせてくださるうとしていらっしやるのか、

考え祈る。

*毎日毎日、少しずつ御霊に従って生きる事を意識して、

祈りながら生活し、それを少しずつ増やしてゆく。

↓神様が肉の欲を少しずつ剥がし、清めてくださる。

神様が、新しくつくりかえてくださるとおっしゃいますから、信じて、希望を持って生きていきたいです。

肉体が栄養を摂取せねば生きられないように、私の中の霊も神様の命によって満たされなければ生きていけないことが実感として迫ります。

詩篇一九・一〇三「あなたのみ言葉はいかにわがあごに甘いことでしょう。蜜にまさってわが口に甘いのです。」このみ言葉をときどき思います。

神様からの命の水とパンとを常にいただける私達は幸せだと思います。聖書のあらゆるところに、宝石のようなみ言葉が散りばめられていることを思うだけで幸せな気分になったりもします。

一方では現実には押しつぶされそうな私がいるのですが……。でも、今年の十二月の感謝会を迎える時、どんな状況の中に置かれていても、喜んで感謝する私になっていることを信じて感謝いたします。

救いから受洗までの記

植 木 賢 一 郎 (前田)

自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい

救いに導かれた時のことを詳しく書こうと思います。

二〇一一年、東京で会社勤めをしていたのですが、私は職場の先輩との人間関係で悩んでいました。その人は社会人のスポーツチームに所属しており、体育会系で、割ときつくものを言う人でした。

「この人なんでこんな言い方をするんだ」とか、「頭ごなしの嫌な人だ」とか、そんなことを呟きながら生活していました。

ちょうどその頃、人間関係を含め生活に虚しさを覚え、教会に通ったり、インターネットの説教動画を視たりし始めていました。説教動画である牧師が、「聖書にかけて生きてきた」と確信あり気に言うのを聴いて、「私も聖書にかけて、聖書に書いてあることを実行してみよう」と思い、新改訳聖書を読み始めました。

自分にもできそうなことばはないかとマタイの福音書か

ら読み始めたのですが、キリストの求めるところはあまりにもハードルが高く、実行できそうなものはないように感じました。そんな中、「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」(マタイ五・四四《新改訳》)という箇所を読み、「これならやれそうだ。苦手な先輩がいるし、この人のために祈ってみよう」と思い、実行してみたのです。

まず考えたのは、敵のために祈るとはどういうことだろうか、ということでした。自分が敵視している人が自分の都合通りになるよう願い求めることは、敵のために祈っているのではなく、自分のために祈っていることになると思いました。「先輩の話し方が柔らかくなりますように」とか、「先輩が良い人になりますように」といった祈りはしませんでした。何と祈ったものかとあれこれ考えましたが、先輩が信仰を持つことが本人にとって本当に良いことだと思い、「先輩が神様のことが分かるようになりそうですように」と祈ることにしました。そして大切なのは、敵のために本当に心を込めて祈ることだと思えました。私はできる限り心を込めて祈ったと思います。他に実行できそうなことばも見当たらなかったため、これ続けました。

ある日、先輩と何か嫌なことがあってモヤモヤしていたのですが、この時も先輩のために祈っていると、頭に先輩と上

手くやりとりしている映像が浮かんできました。そしてその映像は「君は先輩が悪い悪いと言うけれど、あの時君がこういう風に言えば良かったんじゃないか？問題は先輩ではなく君の方にあるんじゃないか？」と私に迫ってくるのです。私はハッとしました。

その後も、先輩のために祈る度に、そのようなことが示されるのです。次第に私自身が心苦しく感じるようになってきました。私は「そんなことはない。悪いのは私ではない」と自分が間違っていることを認めませんでした。そして自分を責めてくる感覚から守る壁を、心の内に積み上げるようになりしました。「あれはああだから、これはこうだから、だから私は悪くない」と弁明を積み上げていったのです。私は敵のために祈ることをやめました。

二〇一一年九月一六日、仕事が終わる、帰宅の準備の中、先輩とやりとりがありました。私はそこで先輩に非常に親身な扱いを受けたのです。確か「ひとりで悩んでいないで、何かあるならちゃんと言葉にして言ってくれ」みたいなことを優しく言われたと思います。私は親身にされ、よくも自分の都合だけを取り上げて先輩が悪いと言っていたものだと思分に失望しました。私は悪くないと積み上げていた壁がガラガ

ラと崩れました。

帰宅しても自分を責める思いはなくなりません。それどころか、先輩とのことだけでなく、他の自分の身勝手なところが次々と芽づる式に心に示されてくるのです。そしてついに私は分かりました。「私はこれまでも正しくなかったし、これから先も正しくなることはない。私は滅ぶ」と。

それからが本当に苦しくて、九月一七日から一九日までの三連休を泣いて過ごしました。どうにか自分を元気づけようとしてはできないのです。自分は正しくなれないという確信が揺るがないのです。二十日、連休が明けても苦しみはなくなりません。仕事も捗らず、食事も上手く喉を通りません。その夜、帰宅してから思い悩んでいると、教会でよく言われる、「罪を告白しなさい」という教えが頭に浮かびました。藁にもすがる気持ちで、自分の罪を言い表し、赦しを求め祈りました。

すると何秒かして、胸のあたりから力が込み上げてきました。そして心に力が満ち溢れました。私は「何だこれは？何が起きているんだ？」と驚きました。さっきまで泣いていたのに、打って変わって喜びにわいているのです。私はこの時から、神様が本当にいらっしやることと私をあわれんでくださっていることを信じるようになりました。

心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ

もうひとつ実行していた、表題のみことばについて書くと思います。

表題のみことばの意味を理解し、みことばを意識して実行していたわけではなかったのですが、振り返ってみるとこれも実行していたように思います。

私は普段から仕事や人間関係のことをウジャウジャ考えていないで、神様のことを考えていた方がよっぽど精神衛生に良いのではないかと思い、普段道を歩いている時から神様のことを考えるようにしました。思った通り、心の具合は良いのでした。

このみことばは「目をさましていなさい」（マタイ二五・一三）とか、「絶えず祈りなさい」（第一テサロニケ五・一七）とか、「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストをいつも思っているいなさい」（第二テモテ二・八）といった箇所を思い起こさせます。

そして九月二十日のことがあってから、私は神様のことが頭から離れなくなったのでした（不完全ではありますが）。

主はわたしたちをかき裂かれたが、またいやし、わたしたちを打たれたが、また包んでくださる

救われてから北九州に帰るまでのことを書こうと思います。

九月二四日、私が当時通っていた教会の牧師に九月二十日までのことを話す機会が与えられました。私が話し終えた後、牧師が自身にあったことを話してくださいました。「神様は経済的な面でも守ってくれます」と話し始め、自分の生活がこれまで守られてきたことを話してくださいました。ひとつひとつの出来事が本当に不思議に感じました。その時は自分が失業し、経済力を失うとは思っていませんでした。

私は精神的な不調で、抗鬱剤を飲みながら会社に行くという生活をしていたのですが、十月中旬あたりから、食欲を失い、ずっと熱が続くようになってしまいました。病院に行ったり、薬や抗生物質を飲んだりしても良くなりません。私は下旬には会社に行くことができなくなりました。

六月に休職しており、次同じようなことがあったら、退職しようと思っていたので、復帰して三ヶ月余りで体調を崩してしまったのはショックでした。

私は治してくれるよう、食って掛かるように祈り続けたのですが、一向に快方に向かわず、それどころか視界がぐわんぐわんと揺れるようになってしまいました。「これはもう抗え

ない」と思い、退職を決めました。

人事部長、上司とホテルの喫茶店で話し、十月三一日付で退職することが決まったのですが、決まったその次の日から一気に熱が引き、食欲も回復していききました。また、北九州に帰ることが決まったので、通っていた心療内科に、これからの服薬等について尋ねに行ったところ、意外にも医師は「退職したなら薬はもう飲まなくて良い」と言います。精神的な不調はもつと重いと思っていたので「え、私の症状ってそんなもんなの?」と驚きました。体調は思った以上の速さで回復していききました。

体調の面でも驚いたのですが、もうひとつ驚いたのは、賞与が支給されたことでした。賞与支給月(十一月)まで勤めなければ支給されないはずなのに、会社は支給すると言うのです。話を聞いてみると、私が休職していた六月に行われた労使交渉で、賞与支給月まで勤めなかった退職者にも賞与を支給するよう、社内ルールが変わったとのことでした。

そういうわけで、信仰が与えられて四十日余りで、あれよあれよと会社を退職し、北九州に帰ることになりました。帰りの新幹線の中では「帰ったら早くハローワークに行かないとなあ」とか、「帰ったらこの教会に通うことになるのどう?」とか、そんなことを考えていました。

全てをご存知である神様

北九州に帰ってからの、和義先生に驚かされた出来事について書くと思います。

母が八幡前田教会に通っていることもあって、二〇一一年十一月六日の聖日礼拝から私も通うことにしました。

礼拝前に、初対面の挨拶ということで、和義先生と少し話をしました。退職して北九州に帰ってきたことを話すと、先生は「それは神様の導きよ」と明るく言ってくださいました。が、私には先生が自分ひとりだけが神様のことを分かっていると思っているように響き、少しムツとしました。「私もそう思います」と言い返すように返事をしてしまい、少し変な空気がなってしまうた記憶があります。

九月二十日のことがあってから、神様に対する渇きは大きなものとなりました。先述の通り、神様のことが頭から離れないほどに。前にも増して、聖書を読んだり、説教動画を視たり、神学用語をインターネットで調べたりするようになりました。そして、そこで説かれていることを、自分のこれまでの人生と照らし合わせるということをしていたように思います。

次第に、キリストの言わんとすることはこういうことなんじゃないかなあ、でもどうだろうなんだろうなあという、釈然

としない感覚を覚えるようになりました。

そうした中であって、神様のこと、聖書のことでも分からないことがあつたら訊くと良いと和義先生に言っていた。いたので、私は質問する内容と、その質問に対する自分なりの答えを予め準備して教会に行くということをしばらくしていました。しかし、牧会で語られる説教の中で、ちょうど自分が準備していた質問に対する答えが返ってきてしまうのでした。説教が終わった頃には質問することがなくなっているということがほとんどだったのです。私が質問できたのは二回だけでした。

神様の御手があるというのはいくつかのことを言うのかと驚いたのです。

ちなみに、私がした二回の質問について書きますと、一回目は『あなたは正しすぎてはならない』（伝道七・十六《新改訳》）とはどういうことか。自分を愛するように隣人を愛せよとの通り、隣人に良かれと色々世話をしたが、自分が身を滅ぼすような方向に事態が進んだ」といったものでした。先生の回答は「聖書は表面的な善行をせよと言っているのではない。その隣人のためを思うなら、あれこれやってあげるのではなく、もっと自立を促すような言動をするべきだった」という感じの内容でした。私は自分で色々振り返ってみて、

その回答に納得しました。

二回目は「この教会は万人祭司であるか」というものでした。先生の回答は「ひとりひとりが神様のみ前で生き、神様と直接交わることができるという意味では万人祭司である」ということでした。回答していただいておりますし訳ないのですが、後から調べてみると、万人祭司という神学用語には様々な意味が付いたり離れたりしてきたようで、私自身が用語の意味をよく理解していなかったように思います。むやみに用語を使わない方が良いことを学んだのでした。

自分の足で、まっすぐに立ちなさい

自立について、正野眞宏兄（以下、正野さん）を通して教えていただいた体験を書こうと思います。

断っておきますが、神様が正野さんを通して私に教えてくだされたのであって、正野さんが偉かったりすごかったりするわけではありません。栄光は神様に帰します。栄光在主です。

十二月四日の一年の感謝会の帰り掛けに、少し話をし、本を借りることになってからでしょうか、正野さんと色々話をするようにになりました。

とにかく学んだことは、牧師やらなんやらを介さず、直（ちよく）で神様と対話していけということでした（普段から先生

方が説教で散々言っていることです）。

正野さんとのやりとりで最も印象に残っているのは、二〇一二年一月四日、新年聖会の午前の聖会後のことです。

午前の説教で「あなたがたの新田を耕せ」（ホセア十・十二）というみことばをいただいたのですが、正野さんはそこを引用して「これから心にある根っ子やら雑草やらを取り除いていかんといかんよ」と励ましてくださいました。私は牧会にもっと出なさいと言われているような気がしたのでしうか、「まあ、午後の聖会が終わったら、今日はもう帰っちゃうんですけどね」と応えたのです。

すると正野さんからは、この頃の私にしてみれば、ちよつとシヨッキンクなことを言われました。

「それは神様とあなたの問題です」と言うのです。

私が想定していたのは、「そんなこと言わないで、夜の聖会も残りなよ」とか、「いやあ、帰ってもいいんじゃない？信仰といってもそんなもんよ」みたいな馴れ合いの言葉が返ってくることでした（この頃の私にはこうした甘っちょろい、しみつたれた考えが根強くありました）。しかし実際に返ってきたのは、それはまあドライな言葉で、私は少し突き放されたような気持ちになりました。

しかし、人と馴れ合ったり、人にへつらったりして、人の

顔色を窺いながら物事を決めても、自分の中に納得はありません。神様を仰ぎながらでなければ、本当に肯定的に進むことはできないと思います。だから、正野さんのこの言葉は、私にとつてためになったのでした。「塩で味つけられた、やさしい言葉」(コロサイ四・六)とは、このような言葉をいうのだと思います。

正野さんとのやりとりを含め、神様は様々なことを通して私に自立を教えてくださいました。次第に、神様が右に行けと言うなら、いくら不利になるように思える状況でも、右に進まなければならないと考えるよう変えられていったのでした。

バプテスマを受けなさい

聖霊に気付かされたことについて書こうと思います。

二〇一一年一二月の終り頃、家で聖書を読んでいると、急に「洗礼を受けなさい」と神様から言われているような感覚になりました。早速、二〇一二年一月の新年聖会の間にバプテスマの申し込みの手続きまで済ませました。

以前からあったことですが、自分の内に、自分ではない何かが別に居るような感覚があり、それが「洗礼を受けなさい」

と言っている感じがするのです。

この感覚は何だろうかと思っていたのですが、二〇一二年一月六日の聖会(ペンテコステの箇所からのメッセージだったと思います)で、聖霊の話をなさったのを聴いて、「ああ、これか」と疑問が晴れたのでした。

東京にいた時も、九月二十日のことがあってからは、洗礼を受けたいという思いがあったのですが、それを押し留めるような感覚が強くあって、叶いませんでした。

二月一六日から洗礼の準備会が設けられ、四月二九日に洗礼式が執り行われたのでした。

義兄の召天

正 野 眞 宏（前田）

平成二十年十二月三日午後四時、帰宅したところに弟隆士から電話があり、今朝方、義兄（私の姉の夫）松崎正治が召されたこと、四日（木）午後七時からお通夜、五日（金）午前十時半から葬儀が鹿児島市の玉泉院中央会館で行われるとのこと。私はすかさず、キリスト教式で行われるのかと聞いたが、長男の正利君からの電話で分らないとのことであった。

私は義兄の肺がんが進行していることは聞いていたが、入院した事は聞いておらず、まだまだ大丈夫と思っていたので、神様の時がこんなに早く来るとは、と驚きを隠せなかった。

召天のニュースを聞いて、一番に頭に浮かんだのが、義兄の信仰がどうだったかということ、葬儀がキリスト教で行われるのかということであった。それは義兄の魂と救いのために、日夜祈ってきたからである。

義兄は信仰を持っていたかと思う反面、教会に

も行っていなかったし、それがどの程度で、自分の信仰と葬儀について、息子の正利君にしっかり告げてくれているかどうか心配だったわけである。

義兄はこれまで事業を経営し、様々な修羅場を生き抜いてきた人で、厳格な人生観をしっかりと持っており、姉の信仰の勧めもなかなか受け付けないという頑固さを持っていたので、私から信仰の話はしにくかったのであるが、私が姉の病氣見舞いに何度か鹿児島へ行っていた時（平成十年）、ある夕食を共にしている席上で、率直に信仰についてどう思っているか聞いたことがある。

その時は、「人間は信仰を持たなければ駄目だ。しかし、私は松崎家の長男で、仏壇を守らねばならず、弟達の事も考えねばならないので……」と、言葉を濁された。私はこれを義兄の精一杯の信仰告白だと理解した。その事を病床の姉に話すと、とても喜び、主人の救いについては、神様から約束を戴いているので、心配していないとのことであった。

いつか以前に、姉が私に「主人は困難な事業を行い、多くの人を扱っている経験からか、説教を聴いて真理を掴むのが、私よりの確で早い」と言ったことがある。確かに義兄の事業経営は目先の利益に動かされず、人に媚びること

もなく、常に正論で、しかも人を自分のペースに乗せて難問を解決していたことを思い出す。

しかし、姉は平成十二年に召天し、本人は教会に行くことはなかった。そして、平成十六年には長女のまり子さんを天国に送るという悲しい目にも会っている。その時も、迷惑をかけられないという思いからか、私達には連絡はなく、後で知ったということもあり、いよいよ義兄の信仰の具合が掴めず、ただ祈るよりほかになかった。

ところがこの度、告別式に出席して、義兄の信仰と主の不思議な導きが明らかにされて、心から主を崇めた次第である。

私は義兄が召された事を聞いた時、弟の正道さん連れで行かねばと思った。それは義兄が入院中の正道さんの事を心配していたこと、そして正道さんも兄を一番頼りにしていたからである。しかし、心配がないわけではなかった。長年の入院生活で、果たして四時間を越える車の移動に耐えられるか、告別式での親戚との対応、ホテルでの身の回りの世話をどうするか等である。ほとんど歩けないため、車椅子を借りることにして、とにかく連れて行くことにした。

親類の人達は正道さんを見て、まさか来てくれるとは思ってもいなかったようで、驚いていた。なにしろ、一度もこういう所に顔を見せたことがなく、交流もなかったからである。親戚一同の名が記された会葬御礼の中にも、（欠席した次兄の名はあったが）彼の名はなかった。しかし、私は連れて来てよかったと思った。それは親戚との交流ができたこともあるが、それ以上に正治兄の生き様に触れて彼の信仰回復の兆しが芽生えてきたからである。

さて、義兄の闘病生活と信仰についてであるが、お世話してくださった方や司式された牧師の話をまとめれば次のとおりである。

義兄は二年ほど前に、首にしこりができて受診したところ、肺がんが発見され、しかも余命何年と告げられた。医者は抗がん剤治療を勧めたが、抗がん剤は他の臓器をも攻撃して悪くする、自然のままに任せると、一切の延命治療を断り、在宅療養で普通の生活をするようにし、仕事（鹿児島酒造社長）も状態が悪くなる今年の三月まで続けた（以後、相談役となる）。死を恐れるでなく、病気を受け入れ、人に不安や愚痴を一言も漏らすことなく、笑顔を絶やさず、自家用車で行きたい所へ行き、好きなゴルフをし、

淡々と生活していた。それは、信仰による平安と天国の望みを持つていたからだ、と、牧師が語った。

私は、癌という大病の身でありながら、果たして一人暮らしができるのだろうか、と思っていた。女性ならまだしも、八二歳の男性である。私なら早々に入院生活したたろう。しかし、義兄は在宅にこだわった。人間らしく生きたいという願いだったと思う。それは自分に対して厳格に処してきた、いい意味の頑固さであったかもしれない。部屋の中は、女性でもできないほど、きちんと整理されていたという。

しかし、それだけでは一人暮らしはできない。それを可能にしたのは、神様が助け人を送られたからである。

その第一は、以前同じ会社に勤めていた女性が同じマンションに住んでいて、食事など何かと世話してくれたとのこと。如何に兄が、職員からも慕われていたかということである。

第二は、姉が行っていた加治屋町教会の長老で、吉松さんと言う方が、度々訪問しては話し相手になり、自分史作成の手助けをしてくださった。この方が弔辞を述べて下さった。

第三は、末吉さんと言うクリスチャンで、同じ教会では

ないのに姉を最後まで世話してくださり、姉が一番信頼し、何もかも任せていた方で、姉が亡くなった後も、寝たきりとなった長女のまり子さんを自宅に引き取り、最後まで世話してくださった。信仰の故とはいえ、本当に頭の下がる方である。この方が毎日のように来てくださり（気になった時は、真夜中でも駆け付けたとのこと）、兄が会社の相談役となった後は、午前中は会社へ行き、昼食を末吉宅で戴き、指圧の治療も受け、お昼寝をして帰るといふ、ゆったりとしたひと時を与えてくれた。彼女が義兄に与えた信仰的影響は大きいと思う。彼女が、実質的に第一の助け手である。

しかし、彼女の好意の最大のものは、彼女の長女が高知西福音教会の久保内宣世牧師と結婚されていたが、その縁で牧師が時々義兄を訪問して、聖書の話をしてくださったことである。

第四の助け手となってくださった久保内牧師は、まだ三五歳の若い牧師であるが（立派な司式をしてくださった）、義兄も彼を信頼したのであろう、まり子さんの告別式の司式も彼に依頼し、自分も家内と娘の所に行きたいので、よろしく頼むと言ったとのこと。御霊が働いて、人生百戦錬磨の勇者が若い牧師の前に、幼子のようにならせていただ

いたのだと思う。食事のお祈りの時も、はつきり「アーメン」と唱和していたとの事である。姉の死後も教会に献金を送り続け、そのために教会のほうから受洗を勧めに来たことがあり、その時は一方的な行為に腹を立てて、「二度と来るな」と怒鳴り返したことがあったという。

義兄は、(以前、姉とは何回か行ったことはあるが)自ら教会に行くことはなかったが、心の中で信仰を守り通し、天国の望みを持たせていただいたのだ。だから、平安の中に守られていたのだと思う。信仰は必ずしも説教を聞いた回数にはよらない。義兄は聖書の話聞いた回数は少なかったが、先の姉の言葉のように短い言葉で真理を悟り、実業家らしく態度を切り替えたのだと思う。そして一切を主に委ねた。日頃から、召された家内と娘の所に行きたいと洩らしていたという。

最後の様子を聞かせてもらった。一ヶ月前までは車の運転もしていたが、十日前から全体状態が悪くなり、寝込むようになった。そのため、末吉姉がズーっと泊り込むようになった(彼女は義兄の召天後、疲れが出て寝込まれたとのこと。体をすり減らすようにして看病してくださったのだ)。長男の正利君が十一月二九〜三十日(日)東京から見

舞いに来た時は、まだ大丈夫でしようという主治医の話なので、いったん家に帰った。しかし、十二月一日に病状が急変したので、急遽久保内牧師が呼び出された。彼が四国から駆けつけ、義兄宅に着いたのは翌日の午前二時頃だった。そこで祈りがなされ、聖書の話がなされた。それから、受洗という話になり、本人は喜んで病床洗礼を受けた。それは亡くなる三時間前のことだった。それからしばらくして、目を開けて「祈ってくれ」と言うので、牧師が祈ると、本人はうなずき、満足したような表情になった。それは「ありがとう」と言っているようだったという。それから笑顔のまま、普通の呼吸をしながら、静かに息を引き取ったとのことである。

通常、肺がんは最後に断末魔の苦しみがあると聞いている。家内の妹の時もそうだったが、義兄の場合は、ほとんど息苦しいということがなかったそうである。実に神様の憐れみと言うほかない。往診をしてくれていた主治医が、「こんな事は初めてだ。ぜひ学会で発表したい」と言ったという。

義兄が実質的に寝込んだのは十日だけであるから、病人のやつれた死に顔ではなかった。もし病院に入院していたら、心身共に病人になっていたに違いない。そういう意味

で、最高の最後の時を過ごしたと言えると思う。

正利君の話では、自分の告別式について遺影の写真から司式者や弔辞を述べてもらう人まで指名し、用意万端準備していたとのこと。いかにも義兄らしいと思った。

私はこの話を聞いたとき、何と主に感謝してよいか、涙が出るほどうれしかった。小さな者の祈りだが、主が答えてくださった。また姉の信仰にこのように応えてくださったのだ。

鹿児島では知名士であったから、三百人近い人が会葬に来ていた。そこで牧師を通して、兄の生き様が語られた。

兄が鹿児島農林専門学校（鹿児島大学農学部の前身）在学中、戦時中で空襲が囁かれていた頃、寮の近くに温泉があった。友人とそこに行こうと出かけようとしたが、石鹼がなかったので止めようと言った次の瞬間、B 29 が爆弾をその温泉に落とし、目の前で多くの死傷者が出たが、兄は九死に一生を得たこと、さらには、東京出張の帰り、羽田で搭乗したい飛行機が満席で乗れなかったので、やむなく次の飛行機にしたが、何と先の飛行機が三宅島の三原山に墜落、全員死亡という事故（有名な日航機木星号墜落事故）から守られた。これらの経験が、人間には死があること、

何か分からないが大きな力が働いていることを感じ、その中でどのように生きるべきか、兄の人生に大きな影響を与えたというエピソードなどを通して、聖書で言う死とは、生きるとはどういうことかが語られた。

それは人々に大きな感銘を与え、よき伝道の間ともなつたと思う。それはまた、姉の死が一粒の麦となって、夫が救いに導かれたことの証しであり、さらに子供や親族へと広がる手程の雲のように思えた。

現在、義兄の遺骨は、私の姉と娘と共に加治屋町教会の墓地に収められている。

（追記）

私は先に義兄の弟、正道さんの事を書いたが、彼は以前（私達家族が仕事の関係で東京へ行っていた昭和五十年頃だったと思う）私の母が引き取って面倒を見ていた時期があり、母の導きで八幡前田教会へ行くようになって、一度は信仰を持った。松岡忠次郎先生が特別集会に来られた時、御霊の感動を受けて、大声を上げて泣いたことがあったと聞いている。しかしその後、独立して生活するようになって信仰から離れ、他の新興宗教へ流れていったが、今回自分の兄がはっきり信仰告白をして天国へ凱旋したこ

とを知り、大きなインパクトを受けたようである。

このため、私達夫婦は一〇二か月に一度くらい病院を訪れ、聖書の話や祈りをして帰っていた。本人の信仰の具合は、終わり方には少し認知症も出て、「よく分かりません」と言うばかりで、十分把握できなかったが、平成二五年二月頃に兄と同じ肺がんが見つかり、しかも余命三カ月と言われた。それで私達もイエス様を信じて天国の望みを持つようにと強く勧めていたが、三月五日に容体が急変したため、急遽ICUに駆けつけ、さらに七日の日にも気になったので仕事の合間に出かけて、枕元で祈った。その時、初めて「ありがとう」と言ってくれた。それは心からの言葉であり、彼の信仰告白のようにも聞こえた。そして、それが最後の言葉となった。その夜、彼は召されたのである。享年、義兄と同じ八二歳だった。

彼は、養護老人ホーム「聖ヨゼフ園」に長年入所していたこともあって、園の方で入院後もお見舞いや金銭管理、洗濯物などのお世話をしていたでいた。全くもって御好意によるものであり、感謝の言葉以外にはない。これも神様の憐れみと導きだったと思う。そういうこともあって、どこで告別式を行うかということになった。聖ヨゼフ園でもしてくださるとのことであつたが、教会を離れて長く、知る人は少な

いが、私はできれば八幡前田教会でお願いしたいと、和義先生の許可を頂いてその旨を申し出ると、快諾してくださった。

三月八日、金生先生によって前夜式を、翌九日午前十一時から、和義先生によって告別式を行わせていただいた。出席者はわずかな身内と聖ヨゼフ園の方々、それに数名の教会員という少人数であつたが、心温まる式だったと思う。

彼の生涯は実に苦勞の多いものであつたが、「ひと度我に來たる者、我必ずこれを捨てじ」(ヨハネ六・三七)の御言のよきに、神は最後に正道さんを御国に導いてくださった。私は神のご真実を覚え、感謝した。これも、姉や義兄の祈りがあつたからだと思う。

彼の遺骨は、生前の希望通り糸島の郷里、松崎家のお墓に埋葬されている。

あまね兄の召天

林 由 記 子（前田）

「山は移り 丘は動いても

わがいつくしみは あなたから移ることなく

平安を与える わが契約は動くことがない」と

あなたを憐れまれる主は 言われる（イザヤ書五四・十）

私の従姉妹の子で、三九歳で召された「周（あまね）」という名前の知的障害者の男性の上に、神様がどのようにご自身の栄光を現わして下さいましたか、感謝をもってお証させていただきます。

外見は身体の不自由はなく、一見、正常に見えます。元氣一杯で、身長も一八五センチ以上あり、なかなかの好青年に見えますが、小さい時から市の養護学校に入寮し、先生方のご指導のおかげで、高校卒業までお世話になりました。ビックリするくらい心身の成長した姿を見せ、頼もしく思っていました。

卒業して、学校の方からお世話していただいて、建設会社

に就職しました。会社が水巻にありましたから、自宅からJRに乗り、そこからバスを乗り継いで一人で行っていました（平日は会社の寮生活ですが）。

元氣でニコニコして、働く事の辛さ、きつさとかは全然見せず、喜んで、休みなく仕事に励んでいました。

三八歳の時、首の痛みを訴えて、産業医大病院へと紹介されました、そこで「多発性骨髄腫」と診断され、「治りません」と宣告されて、一か月の入院となりました。

退院して、自宅の方に行きまして、久しぶりに周君に会いました。体は年齢に合ったように大きく、元氣で、病氣とは信じられませんでした。私と顔を合わすと、周君が「由記ちゃん、『エスの愛、エスの愛』だね」と言って、歌い出したのです。ビックリしました。この賛美は、まだ主人が存命中、夕拝に連れて行くと、従姉妹（周君の母親）から電話があつて、三回ほど夜の集会に連れて行ったことがありました。ちょうど中学生の頃で、最初の賛美の時からすぐに歌い出して、二番、三番と続けて歌うのです。大きな声で、足でリズムを取って。ビックリしたと同時に、涙が溢れて止まりませんでした。その時の賛美を覚えていたのですね。

お婆ちゃんの月命日にお坊さんが来て、お経を上げる前に、周君が「エスの愛、エスの愛、海のごとく寄せ来たり」と突

然歌い出してびっくりしたよ、と従姉妹から聞いた時も驚きましたが、障害のある子供にも、このように神様が働いて下さっていたのを知り、しみじみ感謝したことでした。

夕拝が終わって、利三郎先生が周君のために祈って下さり、それに合わせてアーメンと大きな声で言っておりましたが、それ以来の再会と、今このように賛美している姿に、私は神様の尽きることのない憐れみとご愛に、胸が一杯になりました。

通院が続き、時々入院。それでも元気で、一人でコンビニや本屋、温泉、デパートへと、どこにでも行くのです。病氣？と思うくらい、よく手伝いをし、また外出していました。

骨髓移植もと準備をしていましたが、だんだんときつい日が多くなって行き、時々ソファに横になっていました。帰る時、「お祈りしようね」と言ってお祈りし、「イエス様がいつも一緒だからね」と励まして帰りました。薬もだんだん増えてきて、見ただけで病気になると思うくらいに、ゾーッとしました。

十二月にまた入院し、酸素吸入とか、輸血とか、抗がん剤と続いていた治療でした。母親は、「一切の延命治療はしないでください」と医師の方にお話ししていたようです。私は親である従姉妹も可哀想、周君も可哀想との思いで、ただ全てを導

いておられる主に祈るほかありません。周君の病気を知らされた時に、「神様、この事について、私はどの御言に立ったらよいでしょうか」とお祈りして与えられたのが、「ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである」(ヨハネ九・三)でした。この御言に支えられて、事あるごとに、辛くなった時、たまらなくなった時、この御言に立ち返って、支えていただきました。

ある日、入院していた周君から私に、「由記ちゃん、僕、死ぬの？」と電話がかかってきました。辛くて、可哀想でなりませんが、「大丈夫、イエス様はいつも周君と一緒にいるからね」と励ましていました。退院して自宅に帰ってきた折に、「周君、みんな私達は天国に帰るのよ。イエス様の所に、みんな帰って行くのよ」と話しますと、ジーンと私を真剣に見つめながら聞いています。その姿を見ると、主が届いて下さり、とても平安な顔をしているのが分かりました。

夜に痛みが強いらしく、母親の部屋に来てベッドに潜り込み、痛い痛いと言っていると聞き、ただただ届いて下さる主に、栄光のためと約束して下さった主に、祈るだけでした。

十二月中旬に再入院となり、クリスマスの燭火札押に出席できれば、と願っておりました。それまでに退院できるかどうか分かりませんでしたが、周君に「教会のクリスマスに行

く？」と聞きますと、「行く、行く」と喜んでいたので、退院できよう祈っておりますところ、二十日に退院となり、二四日は私の家族と賛美し、共に夕食を摂り、教会へと皆で出席できました。

お会いする信者の方々、以前から知っておられる方や先生方から声をかけていただき、本当にうれしそうでした。

燭火礼拝が始まり、クリスマスの賛美が沢山プログラムに書かれていましたが、讃美歌を開いて、始めから終わりまで大きな声で全部歌うのです。傍に座っている私は、涙が止まりませんでした。心の中で、「神様、ありがとうございます」と感謝し、主のご愛に胸が一杯で、押し潰されそうでした。

終わって、皆さんとお茶やお菓子を頂き、帰る前に、栄子先生に「主、我を愛す」の賛美歌を伴奏していただいて、私の家族と周君で賛美して、帰宅しました。

一月、二月と一進一退の状態で、痛みは続いているようでした。三月に入り、吐血して救急車で夜中に産業医大へ搬送されましたので、礼拝後に駆けつけました。

比較的安らかに、ベッドに休んでいました。「周君」と、息子夫婦と手を握って、お祈りをして励ましていますと、「かのお」「かのお」と小さい声で言うのです。金生先生には一度お会いしておりましたので、名前を覚えていたのですね。ビッ

クリしました。エツと思い、「金生先生に来てほしいの？」と聞きますと、うなずくのです。「じゃ、電話しようね」と、その時は午後の集会の時間帯なので、どうかと思いましたが、思い切って電話しました。「周君が先生の名前を呼んでいますから、来て下さいませんか」とお願いしたところ、ちょうど他の信者さんの病院にも伺う予定だからと、急いで来てくださいました。

周君は嬉しそうでした。先生と私達と、讃美歌三一二番を歌いました。初めての歌でしたが、大きな声で後をつけて、最後まで歌いました。涙が溢れてたまりませんでした。先生が詩篇二三篇を読んでくださいました。この時も、ずっと先生の後をつけて言うのです。その後、先生が祈ってくださいました。その祈りにも、始めから最後まで、大きな声で先生の後をつけて言うのです。ビックリしました。賛美している時、横にいた周君の父親が泣き出してしまいました。

神様は、何とこのような時を与えてくださったのか、人知では計り知ることのできない神様のご愛とお恵みに、ただ、ただひれ伏すのみです。

それから三日の後、神様の御許に召されて行きました。平成二五年三月十三日のことでした。

葬儀は無宗教で行われ、会社の方から周君に対する感謝の

言葉が続きました。周君の遺体が自宅に帰ってきた時、お手伝いの方々が、口々に「周さん、笑ってる。笑ってる」と大きな声を上げていましたが、葬儀の時も、パート勤務の方々が、「アア、周さん、笑ってるよ、笑ってるよ」と、大きな声で言っただけでした。

周さんは知的障害を持ってこの世に生まれましたが、周さんでなければできない御用を終わって、大好きなイエス様のおそばで、今喜んで、「エスの愛、エスの愛」と賛美していることを思い、ただ、ただ主の憐れみとご愛に、どのように感謝をお捧げしてよいか分かりません。

白い花一杯の会場で、皆様に送っていただいて、多くの方々に助け支えられて、また周君も純真な心で、一人ひとりに接し、多くの方々に良き思い出を残して、素晴らしい生涯だったと思います。

「ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである」(ヨハネ九・三)

主よ、まことにあなたの生ける御言とおりでございました。心から御名を崇めて、感謝申し上げます。陰にあって、先生方を始め、皆さん方のお祈りに、心から感謝いたします。

緊急入院を通して

河 本 米 子 (前田)

このたび、思いがけず脳梗塞を起こし、緊急入院する破目になりました。

これまで病氣らしい病氣をしたことがなく、比較的元気でしたので、突然の事態に驚きましたが、すぐに「汝、静まりて、我の神たるを知れ」(詩篇四六・十)という御言が与えられました。運ばれる救急車の中で、この先どうなるかという思いもありましたが、この御言で平安が与えられました。

製鉄病院の救急治療室に運ばれ、MRI検査を受けることになりました。初めての経験ですし、どこへ引き回されるのか想像もできず、ストレッチに乗せられて天井を見るほかありません。自分の最後の時は、こういうことになるのかな……なんてことを考えたりしました。そこでも先の御言に支えられ、動揺することはありませんでした。

専門的な事は分かりませんが、脳の血管が狭くなって、血液は他の隙を通っていたとか。手を上げてと言われて、上げると上がる。足を上げてと言われて、上げると足も上がる。

言われる事も分かります。

検査のために、身に着けていた物はみな取り去られ、体には様々な検査の管などが付けられます。心電図のモニターも付けられました。全く身動きができず、まるで器具で体を縛りつけられたようです。それは自由を奪われた囚人同様でした。私はふと、パウロとシラスが無実の罪で鞭打たれた上に牢獄に繋がれた時、賛美をしていたことを思い出しました。不当な扱いを受け、どうしようもない中で賛美することの素晴らしさを教えられた時、自然に賛美が込み上げてきました。

「ああ嬉し わが身も 主のものとなりけり

浮世だに さながら あまつ世の心地す

歌わでや あるべき 救われし 身の幸

称えてや あるべき み救いのかしこさ」

讃美歌五二九番でした。そうして賛美しているうちに、それまで嫌だと思っていた思いが、消し飛んでしまいました。

その後も検査が続きましたが、それも一週間で終わり、リハビリとなりました。一生懸命にやっただけで、腰を痛めるという一幕もありましたが、驚くほどの回復が与えられ、思いのほか早く、入院二週間で退院することができました。後遺症もなく、日常生活にほとんど支障はありません。主人が氣遣ってくれますが、自分のペースで家事をやっています。

皆様の祈りに支えられ、今日こうして感謝会にも出させていたでいて感謝しています。

私が入院している間、東京から長女が来てくれて家の事を全部やってくれたことも、主の導きでした。

今回の緊急入院を通して、主が置いて下さった所で主に信頼して一切を任せ、主を賛美することの大切さを学ばせていただきました。

そのことを体験させていただいて、感謝しています。

（一年の感謝会での証から出稿）



信仰と病

正野百合子（前田）

七十を過ぎると、毎年あつちも悪くなった、こつちも悪くなったと、マイナス面ばかり考えるようになり、そうすると寂しくなります。しかし、神様はいろんな経験をさせて下さって、その中を通ることによって、御言が与えられて、信仰を整えてくださることを、このたび、学ばせていただきました。

永く教会に来ておりながら、頭では分かっている、実際の事になると、歩めない弱い者でした。

今年の七月頃、急に右腕が痛み出し、日ごとに痛みがひどくなりました。どうしてそうなったのか、原因は分かりません。家事をするのも苦痛で、包丁も持てないので、左手でしました。思うようにできません。車の運転もできません。座っていても、腕の痛みで横になるほかない状態でした。

近くの整形外科でレントゲンを撮ってもらいましたが大した変化はなく、痛み止めも効果がないため、リハビリに通

って下さいとのことでした。

二週間経っても、痛みが変わらないので、大きな病院でCT検査をすることになりました。

私は初めての経験でしたが、ドン、ドンと大きな音のする暗い部屋に横になって耳栓をされ、三十分間の過ぎるのをじっと待つのです。五分待つのも長いと感じるのに、何を考えて過ごそうかと思ひ、今までの神様の恵みを数えてみることにしました。すると、長いと思っていた時間が、あっという間に過ぎ、検査が終了しました。

次の日、結果を診せてもらいました。少し首の関節にヘルニアがあるが、これがこんな痛みを起こす原因とはならないはず。しばらくリハビリに通って下さい、二、三か月ですねとのこと。私は、こんなに良い検査機械ができて、全てが分かるわけではない、神様に祈って、御言に従って行こうと思ひました。

次の日曜日、礼拝後の神癒の祈りで、「主を待ち望め、強く、かつ雄々しくあれ。主を待ち望め」(詩篇二七・十四)を頂きましたので、この御言を握って行くことにしました。

今年の夏は格別に暑く、家の中でゴロゴロしていることは、怠け者のようで、やりたい事が出来ないのは辛いことです。どうなるかな、いつまでかなと思う時、神様の時が来るまで

待つほかないと思いました。神様のなさる時が一番良い時、「全てに時がある」と決心し、神様に一切を委ねることにしました。

そう決心して一ヶ月くらいすると、少しずつ痛みが和らぎ、包丁も少しずつ使えるようになり、教会の集会でお話を聞く時も、祈っていると支えられて、それほどの痛みを感じることはありませんでした。それからだんだん回復して、二か月足らず、医者も驚く速さで、すっかり癒されたのです。

状態ばかり見て、一步を踏み出せないでいましたが、与えられた御言を握り、結果がどうなるうと思いつつ神様に一切を委ねた時、神様が働いて下さったのです。信仰の秘訣というか、コツというか、それを学ばせていただきました。この事は、今後の信仰に繋がるものだと思います、心から感謝しています。

私が何もできなかった間、日頃何もしない主人がカボチャを切ったり、後片づけをしたりしてくれました。七〇点ぐらいでしょうか。この事も、もし私が先に逝ったら、困らないように自分の事は自分でできるように、主の訓練の時ではなかったかと思えます。この面でも、主が一番良いことをしてくれたと感謝しています。

今回の病を通して、「苦しみにあつたことは、わたしに良

い事です。これによってわたしはあなたのおきてを学ぶことができました」(詩篇一一九・七一)を実体験させていただきました。

(二年の感謝会での証から出稿)



ひとりごと

——神様への手紙——

井田 れい子（大濠）

また私の嫌いな季節がやってきた。

今のこの湿気と暑さが苦手で、私の体力はこの時期が最も消耗する。

「昔はもともと元気があったのに……」と、つい過去を振り返ってしまう。

先日、ある姉妹が、思いもかけず二冊の本を貸してくださいました。一冊は、一九九五年発行の「私の天路歷程」と題する「ぶどうの木」の特別号だった。東俊郎牧師の証し集で、私はお会いしたことはないが、和義先生に頂いた創立五十年誌「燃える柴」の中に、東牧師の小さな顔写真と献身者としての紹介文があり、それを拝読したことがある。表紙を開くと榎本利三郎先生の巻頭言があった。

なんだか「ぶどうの木」の原稿を書きなさい」と言われ

ているようで、すぐに本を閉じ、机の右隅に置き、しばらくそのままにしていた。書くつもりが無かったからである。

そして、今日の火曜会で「私の父がよく言っていました……」と利三郎先生のお話になった。「天路歷程」と書かれた黄色い本が頭をかすめた。

何ひとつ書く内容が浮かんでこないのに、何故か筆を取っている自分がここにいる……。

八年前の二〇〇六年四月九日に主人と二人で、初めて大濠公園教会に行った。

その日の聖餐式に出席させて頂き、その上、帰り際に榎本先生に「どうぞ、お持ちください」と言われるままに、出来上がったばかりの「汝ハ我に従へ 榎本利三郎・百合子師記念誌」を其々一冊ずつ頂いて帰った。今から考えると何と図々しいことだろう。

しかし、この本のお陰で、礼拝に通いながらこの教会を知るよりずっと早く、八幡前田教会、大濠公園教会の成り立ち、及び利三郎・百合子先生ご夫妻・和義先生の生い立ち、お人柄を知ることができた。一度もお会いしたことなど無いのに、その本の中にあるお若い頃の写真や、ご家族の写真を何度か

拝見していると、不思議にその頃、自分もその教会に居たかのような気になってきた。そして書かれていることにも感銘を受けた。実際、当番と委員の役割を担って送っていた以前の教会生活は疲れるだけで、喜びなどなかった。特に主人は大きな役目を背負われ、嘆きの毎日だった。今は「毎週」とまではいかないが、教会掃除には喜びをもって行っている。お忙しい中、早くから椅子を拭いておられる先生を見ると頭の下がる思いがする。

転勤族である私達夫婦は、これまで十二回の引越えをした（手狭になって自分達で引越したものもあるが）。大濠公園教会は九つ目の教会である。これまで交わりを持たせて頂いた牧師先生ご夫妻や兄弟姉妹は数知れない。とても有難いことだと思っている。其々の教会の雰囲気や姉妹方と交わった会話などは結構覚えていた。

素晴らしいクリスチャンの諸先輩方にお会いしたが、最も強く印象に残っているのは、一九八六年にロンドンでお会いした恵子ホームズ師である。彼女はその二年前にイギリス人のご主人を不慮の飛行機事故で亡くしていた。私と会った頃はようやく悲しみと心の傷が少しずつ癒え、他人と対話できる状態にまでなっていた。イギリス人に日本語を教えながら、

我が家の子と同じくらしいの男の子二人を育て、異国の地で懸命に頑張っていた。教会ではその日の財布の中にあるお金を全額献金していた。横に座っていた私は驚きで言葉がでなかった。そして彼女の祈りは真剣だった。当時クリスチャンになりたての私は、彼女から神様に対する真摯な態度を学ばせてもらった。私が日本に帰国した後、彼女は日本の戦争捕虜になり虐待を受けた、元イギリス兵士達二人一人を訪ね歩き、十年以上に渡って日本人の心を伝え、謝罪し、和解を求め続けた。当初は当然ながら門前払い、会ってもらえても必ず「ドイツ人は自分達の非を認めて謝罪し賠償したのに、なぜ日本人は隠し通そうとするのか、なぜ謝らないのか！」と追及された。幾多の侮辱にもめげず、耐えて和解の日まで彼女が支えにしたものは、あの真剣な祈りと「祈りは必ずきかれる」という神様への全幅の信頼だったと思う。

また国際会議にも出られる程の英語力と優秀な能力の賜物を持ち、牧師となり、現在宮崎の小さな教会で牧会しておられるK姉。彼女は「服が必要になると、ちゃんと神様に与えられるのよ」と、教会員に貰ったお下りの服を笑顔で着ておられた。二年程お会いしていない。どうしておられるだろうか。

目立たないが、大きな重荷を背負いながらも、黙々と信仰

生活を送っておられたS姉。まだまだ沢山の方々にお会いした。未熟な私には驚くことばかりだったが、そんなお交わりを持てたこと、心から感謝している。

二〇一三年十一月十二日、母が亡くなった。

その年の八月の熱い日に母は入院し、一度は退院したものの、九月二四日に再入院した。この時から私は母の死期が近いことを察した。食欲が落ちた上に体がむくんできたからである。それから召される日まで、母が眠っている時は、傍で神様に折り、感謝し、母には「ありがとう」と何度も御礼を言った。(起きている時には、母に死期が近いと感づかれそうに怖くて言えなかった)。目を覚ましている時は、一方的ではあるが、沢山の思い出話をし、母の好きな歌を歌った。母は体調のいい時は小さな声で一一緒に口ずさんでくれた。

母は賛美歌の中でクリスマスソングになっている一〇九、一一一、一一二番そして何故か四〇五番を知っていた。四〇五番を共に歌う時、私は嗚咽しそうになり、歌えなかった。そして母はろうそくの火が消えるように召されていった。

私は月日の流れと共に、母の身体機能がひとつずつ失われていく様を、つぶさに、最後の一瞬まで見た。紫色になっていく母の足先を必死に擦っている自分がいた……。

亡くなった後も、折にふれて色々な思いが交錯するが、「神様は最善の時を備えて、ここに導かれたことを信じます」という、メールに頂いた先生からのメッセージに救われている。あれから、もう七ヶ月の月日が流れた。

「神様、感謝いたします。

母が亡くなる最後の瞬間まで、傍に居ることができました。

母は神様のお力で、あんなに頑張ることができました。賛美歌も一緒に歌いましたよ！

九三歳まで生かして下さり有難うございます。

私も健康が支えられ、主人の協力を得て頑張ることができました。

そちらに父も母も、主人の母もいることと思います。

今頃は、久し振りに会った家族と楽しく語らっているでしょうか？

神様、皆をよろしく願いますね！」

二〇一四年七月一日 井田れい子

五七五

伊 規 須 太 郎（戸畑）

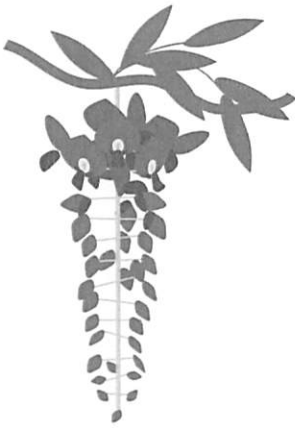
○ 順番に 年とることを つい忘れ

○ 知らん顔 覚めた思いで 握手する

○ 下界から はるか聞こえる シヤバの声

○ 絶景を あかしのできぬ もどかしさ

○ 生かすより 死なせるワザの 難しさ



母の祈り

野 村 仰 一（前田）

祈りのうちにおぼえていただいています母の近況について、紙面をかりて報告させていただきます。

母は二〇一二年一月に脳出血の手術をし、その時から三度の入退院を繰り返して今日に至っています。

手術直後は、これといった後遺症もなくリハビリに励んでいましたが、二度の痙攣発作を経て（そのたびに入退院を繰り返したのですが）、今では自力で歩行することはできなくなりました。また、それに並行するように認知症の症状が進行し、最近では、私が誰であるかさえはつきり認識できていないようです。

母は二〇一三年九月から、小倉北区にある特別養護老人ホームに入居していますが、私の住居から遠くなったため、週に一、二度、土曜か日曜日に様子を見に行くのが常となりました。様子を見に行くといっても、特に母と話すような話題もありませんので、礼拝のメッセージなどを聞かせているのですが、その時ばかりは、それまでぼんやりとしていた目つ

きが、何か考えているような、何かに集中しているような表情に変わっているように見えます。そして終わりの賛美になると、讃美歌や靈感賦の歌詞が自然と口をついて出てくるのでしょうか、イヤホンから聞こえてくる声にあわせて歌い始めるのです。最後に「どうだった、お話よくわかった？」と聞くと、「あゝ、よくわかった。いいお話やった。」と穏やかな表情でこたえるので、私も少しホッとします。

最近では、自分のお祈りをすることも殆どなくなつて、もうそれは無理なのかなと思つていましたが、つい先日、礼拝のテープを聞き終えたあとに、急に自分からお祈りをはじめましたので驚かされました。

「天の父なる神様、感謝いたします。」

長い間、さまざまなことでも礼拝をまもることができませんでしたでしたが、今日はあなたの憐みによつて礼拝をまもらせていただき感謝いたします。

あなたが、このような者を憐れんで、今日まで持ち運んで下さいました。……

子供達、孫たちにいたるまで、神さまのご愛のうちに
お従ひしていくことができるように……」

祈りの言葉は、途中で言葉に詰まつたり、ただただ同じことを何度も繰り返して祈るばかりでしたが、神様は母の心のう

ちに祈る思いを残しておいてくださっているのだと感謝しました。

正直なところ、いつもの母の姿を見ると、何もわからなくなつて、何をすることもなく、何かができるわけでもなく、ただ毎日をぼんやりと生きている意味ってなんだろうと思うこともあります。

しかし、思いがけない母の祈りの姿をとおして、神さまのなされることに一つとして無駄なことはない、人の目から見てもどんな状況であろうとも、神さまは意味があつて母をこのような状況に置き、生かしておられるのだということを教えられました。

母は現在九一歳になります。今日に至るまで母を支えてくださった神様は、母がその使命を終え主のもとに帰る日まで、たとえ何も分からない、何も思い出せないようになっても、心穏やかに、主を賛美しつつ平安な日々を過ごさせてくださると信じて感謝いたします。

今日も母は、日々の皆様の祈りのうちに支えられて元気に過ごしています。お祈りを感謝いたします。

二〇一四年七月

患者待合室

長 田 正 幸 (前田)

後期高齢者のわたしは、あれこれと病気をかかえることになった。

いま乳がんケアの医者を含め、複数の主治医がいる。一か月に一回、または五十六日に一回は病院に来るよう指示される。診療は予約時刻に始まることは殆どない。呼び出しがあるまで待つしかない。三十分、一時間待つのも珍しくない。

あるとき、本を読んでいたら眠くなってしまう、本をバサツと落とし、周りの耳目を集めた。これはばつが悪いですネ。あるときも新聞を読んでいたら眠ってしまった、呼び出しのマイクも聞こえず(耳の悪いせいもある)「ナガタマサユキさま」と看護師がわざわざ待合室に出てきて大勢の前で呼んだ。こちらは電気仕掛けおもちゃの人形のように、ピョコンとはね、慌てて診察室にはいった。これはもつと恰好悪いですネ。

それで次からは読むことはやめた。行き来する人を眺めることにした。

「神は自分のかたちに人を創造された。」(創世記一・二七)
《日々の聖言二〇一一・四・一五》「私は、光をつくり、また暗きを創造し、繁栄をつくり、またわがわいを創造する。わたしは主である、すべてこれらの事をなす者である。」(イザヤ四五・七)

神さまはわたしたちの想像を超えた大きな存在です。この方をどのように語ればよいか、言葉がありません。天も地も、宇宙も、森羅万象ことごとくを創造し、それらを一分一厘狂いなく持ち運んでおられます。今日もこの方によって造られ、生かされ、有らしめられているのです。人の世の幸、不幸も例外なく、この方によって創造されているのです。人間のわざ、知恵、力によるものではありません。(KE)》

神の御子なる主は、水汲みに来たサマリヤの女のことを明らかにされたように、「この世のすべての一人ひとりを生まれる前から把握し、それぞれ成長させ、それをつぶさに憶え、白髪頭になるまでお運びになる」とご説教でおうかがいしたような気がする。

病院患者待合室という限られた範囲において眺めていても、老若男女、まさに神さま主が、すべての人を取り仕切っておられるようにわたしには思える。

人さまさま……その1

初夏であつたか。真横に四十歳くらいの男性。見るともなく見ていると、特異な姿、服装と判明した。パンチパーマ、黒の開襟シャツ、黒のズボン。こう書くと顔は獰猛(どうもう)と思われるでしょうが、そうではなく、細面で、気弱そうな表情なのだ。

突然、口を大きく開けてあくびをした。その瞬間、わたくしに閃くものがあつた。

サッカーワールドカップ南アフリカ大会で、デンマーク(だったか)との試合において、日本が見事ゴールを決めた。その選手がおおきく口をあけ、おそらく雄たけびをあげているらしい横顔をテレビは写し出した。

それがパンチパーマの大あくびとそっくりであつた。

神さまは、人間の精神が最も高揚したときと、人間の精神が最も弛緩したときを、全く同じにされたのだ、とわたしは発見したのである。

人さまさま……その2

ある日、眺めていると、相撲部屋の住人のような、堂々とした体格、顔は丸顔、悠々と通り過ぎた。医師ではなさそう。医師は身分証のようなものを下げている。とすると、あれで

病人かしらん。いや見舞いに行くのかしらん。それにしては手ぶらであつたな。時間帯も違う。何者だろう。

しばらくしたら、青い顔した五〇歳代と見える男性、ひよろひよろとしたわりに背の高い男性。骨皮筋衛門。吹けばつぶような足取りで過ぎていった。神さまは胃腸病を与えられたか。

車いすの人もよく通る。車いすに乗っている人は、うつむき加減、冴えない表情である。点滴のビンを従えている人もいる。

七十か八十歳代か女性もそうであつた。女性の歳はよくわからないことが多い。その車を押していたのは、明らかに娘さん。娘さんはにこにこしながら押していった。その顔は相似形(そうじけい)。母親の二、三十年前は今の娘さんの顔であつたに違いない。どうぞ神さまのみめぐみによって癒されますように。アーメン。

人さまさま……その3

まだ暑さの残る初秋。

婦人の歳は判らないが六〇歳前後か。緑のワンピースだが、小さな真つ赤な木の葉のような模様と、数は少ないが黄色の同じ模様が散りばめてある。

体操女子選手のように、顔を上向きにあげて診察室へ無言で入った。そのすぐあとを夫であろう、顔の分だけ背の高い男性が続いた。

知的で、組織の上級管理職のような雰囲気を持った人であった。

白髪が少し混じり、白の半そで開襟シャツ、グレイのズボンであった。診察室に入るとき、男性がわりと大きな声で「先生、お世話様になります」とあいさつした。

あれ！患者はどちらだ。

わたしは想像した。家庭では妻のほうが強く、夫は言われるままに、従っているのではないか。この夫婦関係はどうもそんな雰囲気である。

「あなた、ごみを捨ててきなさい。」「はい。」

「二階を掃除しなさい。」「はい。」

言われるまま、かの夫は従順に行動しているのではなからうか。それで家庭の平和は保たれているに違いない。

お前のところの夫婦関係はどうだ？ですって（ノーコメント）。主がよくご存じです。

かの夫に、主の豊かなみ恵みにより、幸多かれと祈るしだいである。

以上

信仰雑感（七）

首 藤 正（前田）

一 コンプレックス

クリスチャンになって良かったと思うことがひとつある。劣等感が消えたことである。周りの人が普通に持っている対人関係の資質が自分には欠けているという思いが長い間、苦の種だった。それは勿論今もある。落差は茶碗の欠け同様埋めようがない。ないけれども、それはそれで良いではないかと受け入れられるようになったのである。

欠けの埋め合わせが長年の念願であり、努力の対象であった。これさえ充足できれば人並みとなれるという思い込みにつき動かされていて、他のことは殆ど顧みなかった。関心がそのことに集中している間は丁度虹を追っかけるようなものだった。心の向き方が「主を主とする」信仰へと傾いていくにつれて、いつの間にか劣等感が消えてゆき、気が付いてみたら「あれがあったこそ、こうなれたのかもしれない」と振り返れるようになったのである。

二 苦慮

私は弱り果てている。

祈っても一向に改まらないからである。

家内は私の質問に対して質問を以て答える癖がある。例えば、外食を思い立って私が「どこへ行こうか？」と意向を尋ねると、決まって「どこへ行きましょうか？」とくる。「何を食べようか？」と希望を訊くと、「何を食べたいですか？」と逆に訊き返してくる。

「訊いているのは私だ。質問に答えるのに質問を以てされちゃ話が進まんじやないか」とクレームをつけても、全然意に介さない。そういう答え方で以て相談をしているつもりらしい。それじゃ困るから何とか対応が建設的に改まるよう計らって下さいと祈って神様に訴えたことがある。全然旧態依然であるばかりか、お前自身が神様に似たような態度をとっているのではないかという迫られる気配すらあって、持って生まれた体質だけに、今もって苦慮気味でなくもないのである。

三 一方通行

散歩の途中でいつの頃からか、顔を合わすといひ話し込むようになった同じ年の老人がいる。

電気工事の仕事に長年携わり、今は引退の身。処々方々へ出張して多くの体験があり、色々と思ひ出話をしてくれるのを拝聴するわけだが、概ね聞く一方で過ぎる。

話しが終わると気が済むようで、「じゃ、また」と互いに言つて背を向けるという具合である。

老人の常で、自分のことを話すのに熱心で、人の話には余り関心を示さない。

時々、自分が臨床心理士の役目を果たしているような気になることがあった。

聞くことに徹することを求められているようなのである。勿論それはそれなりに面白く、有益ではある。しかし正直なところ、これは交流と言えないという憾み(うらみ)は残るのである。

神様に対して自分も申し上げる一方で、神様の側のご発言を聞こうとはしてないのではないかと、反省させられるのである。

四 反転

八三才になんなんとするこれまでの生涯を振り返って、どうしてこんな者をこのように顧みて下さったのかと、あのダビデが感に堪えて歌ったのにも似た感慨を抱かずにはおれな

い。ただダビデと違ふところは、人生の当初からダビデは敬虔そのものだったのに反して、私は幾度も神様に対して恨み辛みを並べて止まなかったことである。「なぜこんな欠陥人間に造って下さったのですか。いっそ生まれてこなかった方が良かった」と散々愚痴をこぼしていたのである。

しかし結果的には、その自分ではどうしようもない欠陥があつたればこそ、イエス様に近づけられ福音に接することができた。

「わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」

(第二コリント十二・九)

との聖言は、たとい我田引水的であろうとも、私にも当て嵌まった。この欠陥がなければ、今味わっているような心楽しい平安はなかったと、つくづく感謝に堪えないのである。

五 併行

ある時、連れ合いが何を思ったのか、こう言った。

「あなたは右の岸辺、私は左の岸辺を行っていると思つてます。」

即座に私は答えた。

「おーいと呼んでもなかなか声は届かず、橋も見当たらず、行き来もできないということかね？」

返事はなかった。

私は信者、家内はそうではない。

関心の置き所が違ふので、話題ひとつすれ違ふ。熱心に新聞の三面記事を読んで話題に取り上げる家内へ余り取り合わず、時々聖書引用の話題を持ち出す私に対して、噛み合わないと感じているらしい。

前記の発言はなかなか言い得ていると感心した。互いの姿は見えていて同じように下流へ向かつて歩いてはいいるが、渡る橋もなさそうで、とてもとても膝突き合わせて話せる段ではないとの感想だ。人にはできないが、何でもおできになる神様だけが今や恃み(たのみ)である。

六 アデュー

パウロが生きた西暦一世紀のローマ帝国は、文字通り絶頂期にあつた。パクスロマーナといって、ローマ帝国の版図内はこれ以上望めないくらい平和が保たれていた。

ところが、パウロが帝都の信徒へ送った書簡の冒頭後半には、人心のこの上ない醜惡な乱れへの告発が連ねてある。実際に各地を自分の足で見て廻った、実見による批判なのである。それを讀むと、自分達が生きている今日の世界のことを指摘しているように思われてならない。神に背を向けている

人間の在り様は、時代を超えて少しも変わらないのだ。のみならず他人事ではなく、自分自身も又神を認めず神を神としないなら、ここに指摘されているのと同じ状態に陥るのである。つまり初めのアダムは誰にも宿っているのである。終りのアダムたるイエス様が引き上げて下さらなかったら、望みはなかった。

罪の泥沼よ、さようならとは。けっして。

七 玉成

ダビデの伝記や詩作を読むと、初代のサウル王を始めとして、彼への敵対者が非常に多かったことが分かる。それも、故なくして彼の失脚を願ひ、命をつけ狙う輩の※波状攻撃を受けた感じがある。普通なら、どうして私がこんな目に合わねばならないのかと、天を仰いで怨むところである。ところが彼にはそんなところが微塵もなかった。いよいよますます切に神に助けを求め、神に信賴する心を強めた。そのペースに羊飼いを行っていた少年時代の経験があり、神に信賴し、羊を奪いに來た野獸をうち倒した実績の裏打ちがあつたのかもしれない。俗に

「三つ子の魂、百迄」

という、少年時代に獲得した信仰を生涯守り通したのが彼の

人生という見方も成り立つ。

波乱万丈の幾多の苦難は、彼のこの信仰を全うするための砥石であり試金石だった。

「艱難、汝を玉にす」の見本のようだ。

※何回にもわたって繰り返し攻撃を加えること

八 A CONCLUSION (結論)

どんな人を見ても、イエス様がご自分の命を以て買い取られた貴重な人であると思えば、仇や疎かに対することはできない。

当人にその自覚はなくとも、知らないだけで、その事実に変わりはないのであつて、イエス様の視点で人を見ないわけにはいかない。

イエス様の視点から見るとは、取りも直さずイエス様のご愛を基として振舞うことを意味する。そうすることだけが有意味なのである。意味があるとは残るに値する有益事ということである。ソロモン王は、考えられる限りのありとあらゆることに手を染めて結論を得た。英語でいえば

VANITY OF VANITY
ALL IS VANITY

文語訳でいえば

空の空なる哉　すべて空なり

つまり主のご愛に基がないものは、悉く空しく消えると言いつつたわけだ。

九　寸感

妻は言う。「あなたは右岸、私は左岸。」

女は左岸で男は右岸。それとも信者は右岸で未信者は左岸とでも言いたいのか。

それにしても、思い出すのはサウルとダビデ。

マオンの荒野の山のこちら側をサウルは行き、山の向こう側をダビデは行った追跡劇(サムエル上二三・二六―二七)。

敵ペリシテ襲来の急報で間一髪拿捕(だほ)を免れたダビデと、取り逃して※切齒扼腕(せつしやくわん)したサウル。

同じ人生の川の流れに沿うて海へ向かうのにあちらは左岸、こちらは右岸。

姿は認めれども、渡るに橋なし

声は聞こゆれども、意味は届かず

という、じれったさを妻は指摘したのかもしれない。な―るほど、な―るほど言い得て妙だわい。きっとイエス様も救いに来た人間達に同じようにお感じになつてゐるはず。

「わたしは上から霊によつて語る。あなたがたは地から肉に

よつて聞こうとする。」

すれ違ふのは当然。十字架の哀しみ。

※怒り・悔しき・無念さなどの気持ちから、歯ぎしりをし腕を強く握り締めること

十　納得

聖書は神の言だという。神様が人間の言葉を使うとは、不思議でしようがなかった。

しかし考えてみると、神様が人間を救うのに人間の姿を借りなければ手立てがなかったのと、軌を一つにすることもあつたと気が付いた。相手の用いているものを用いて初めて相手に働きかけることができるのだ。外国へ行って自分の国の言葉で話しかけても、なんら用を成さないのは当たり前で、先方の言葉で語つて初めて意を通じさすことができるわけだ。聖書にも、異言で語つても相手には何のことか分からぬと説いてある。人に働きかけるには人の言葉の使用が前提であるし、徹底さすには相手と同じ姿をとることが要件であることは自明の理なのである。イエス様が人の姿をとつて人の世に來て下さり、人の言葉を借りて神の言をお伝えになつたのは、必須のことだった。

これとて万能者にして初めてお出来になることだった。

十一 コトバ考

テレビを見ていたら、誰かが「人間の営みは結局言葉しか残らない」と言っていた。

形あるものは遅かれ早かれ崩れて消滅し、言葉として記述したものだけが残っていく、と補足していた。見えるものは一時的で、見えないものが永存するという聖書の言葉と符合するようで、それは言葉そのものは本質において見えないものに属するからである。

言葉に準ずるものに記憶がある。

記憶は人の頭の中にしかない。頭の中は、見ることできない最たるものである。

その記憶を固定さすものに、言葉がある。

記憶を取り出す手立ても又言葉である。

その働きは神経に似ている。つまり伝達という働きをする点において酷似している。

言葉を失うと、記憶も又甦らない。

言葉は人において、生命と※不即不離の関係にある。極端に言えば、言葉こそ命である。

少なくとも、命の痕跡で十分ありうるものだ。

※強く結びつきもせず、また離れもしない関係

十二 魂の衣

自分のことばかり喋るようになったら、老化の始まりか、認知症の兆しである。人の上ならすぐ分かるが、悲しいかな、自分のこととなるとなかなか気付かない。どうしたら良いか、一番の早道は、やはり祈ることである。目を開いて下さる。その上、多少はブレイキを掛けて下さるのが有難い。肉体は魂の衣服であるから、衣服の必然で劣化は避けられない。手入れや取り扱いが良ければ、多少は長持ちする。早めの手当てで、延命も期待可能。

とはいっても、用途の使命が終われば、潔く脱ぎ捨てるのが定め。ミカンを食べるには、皮を剥くしかない。皮は皮の役目が終われば、大地に帰してやるのが自然。実を保護することを求められている間は、十二分に役目を果たすに越したことはないし、その為の祈りをする可。日用の糧のひとつだ。

モーセやカレブのごとき老いて尚※嬰鑠(かくしゃく)の望み無きにしもあらず。

※丈夫で元気の良い様

十三 管見

ダビデには敵も多かったが、味方も少なくなかった。彼が

積極的に求めたのではなく、先方の方から寄り集って来た。それをさせたのは神様であるから、感謝は神様に向けられて、人間の味方へは取り立てて恩義を感じる風でもなかった。ウエイトは圧倒的に神様に向けられていたのだ。彼に味方して助力を惜しまなかった大多数も又、心中では神様への忠誠から発していたとしても不思議はない。

中にはダビデに対して恩着せがましい思いを抱いていたのも、確かにいることはいた。

その代表的人物に、従兄弟のヨアブ将軍がいる。強迫的言辞や命令無視に見られる自己中心性で、それがハッキリ読み取れた。

対人間性向の点でダビデを特徴付けられるのは、モーセにもあるもので、柔和であった。

周囲の目には、時として齒痒く思えるほどだった。それはパウロにもあり、神を神とする敬虔に付随する性質の一つであるのかもしれない。

十四 握手

イエス様と人々の間に交わされる問答は、一見ちぐはぐで、「噛み合っていない」感じを免れない。レベルが違うから当然である。

イエス様の語りたいことと人々の理解力との間に横わる段差は、いわば天と地ほどの距離があった。イエス様の身からすれば、齒痒いほどであったに違いない。

どうして分かってくれないのかという、切々たる想いが行間から伝わってくる。

この感じは、同じように使徒パウロの書簡にも滲み出ている。預言者の書にも、あからさまに天が地よりも高いように、較べようがないとハッキリ指摘されている。この超えがたい段差を渡りゆかせるものが助け手のご聖霊であることは、聖書のこれ又明解な教示であった。この助けの手を握る手立ては只一つ、信頼をもつて祈ることであることは言うまでもない。祈りがイエス様にしっかりと繋げてくれる、確実な握手なのだ。勿論。

十五 あえぎ

※アライース、目覚める毎に、我が頭の崩れゆくのが分かる。

朝飯作りの手順の狂うことで、それと知れるのだ。なんでもなく昨日までしていたことが、今日出来なくなっている。とりこぼすのだ。ひとつ、又ひとつ失ってゆく日常の些事。

あの、ゆくとして可ならざるはなかった聖徒パウロの身にも起きたことなのか。

「外なる人は日毎に破れども、内なる人は日毎に新しく
せらる也。」(第二コリント三・十六)

なんと矛盾ではあるまいか。

悲しいかな、手に取るように感じられるのは、日毎に弱ってゆく外なる人のことであつて、内なる人のことではない。パウロの目にはそれが分かつて、私にはムリ。私に出来ることは、この御言葉を信じてゆくことだけ。

わがたましいよ わが内なる人よ

外なる人の崩れに引きずられないでくれ

霊の重ね着に努めて我を支えよかし

※*Lord*＝悲しいかな

十六 天秤

昔流に言えば、大蔵大臣は総理大臣に次ぐ重要ポストである。一国の財布を握る地位を尊重するのは当然である。総理からの信頼の厚い者が任命されるわけである。

われらの主イエス様が一行の財布を預けたのは、誰であつたか。信頼して委ねたのは、十二人のうち誰であつたか。この事実から、主の信頼のどれほどであつたかを知ることができよう。その信頼に応えて終始一貫していたら、同僚のヨハネ兄弟が切に望んでいた主の右に名実ともに坐らせられてい

たかもしれないのである。彼は信頼の価値に無頓着で、金銭のそれには敏感だったことが疵。

というより、信頼に含まれる愛に無神経だった、という方がより適切だった。

能力重視の余り、神と肩を並べることを夢見て人祖夫婦は取り返しのつかぬ失敗を犯した。

愛なき振る舞いの有害無益であることを、パウロの強調したのは故なきことではない。

十七 粉微塵

神様を尊ぶ者を、神様も又重んじて下さるという。聖書に、はつきりとそう書いてある。

目に見える形でも、他の人間からも軽んじられないということが起きる。

例えば、モーセがそうだった。敵対関係にあるバロの家臣たちからさえ、畏敬の目で以て見られるに至った。たとい周りの人間が軽んじようとも、神様が許し給わなかつた。

究極の証しは、イエス様の上に成就した。

エリート人間たちから全否定を受けて十字架上に抹殺されただけども、神様は復活という大肯定を以て、人間の扱いを覆された。

のみならず、霊なる救い主として内外に宣告なさった。人智は、完膚なきまでに粉砕されたのである。己を無にしてひたすら信受することだけが、命に至る唯一の道として示された。この道を選ぶ者だけが義とされ、尊しと見做されるのである。採る、採らぬの選択の自由は人の側にあり、人呼んでこれを人間の尊厳という※累卵の如き危うさかな。

※積み上げた卵のように、不安定で危険な状態

十八 どうします？

イエス様には、いろんな面がある。

まず神の御子、次に救い主、仕える人、隅の首石（おやいし）と数え上げればきりが無い。派遣者でもあられる。忘れてはならないのは、神の言そのものでお話し、天地万物の創造のよりどころでもあり、審き主、救われた者たちという神の家族の長子でもいらつしやる。ぶどうの木に譬えると、幹に相当する樹液の供給元でもある。最新の生物学でいえば、幹細胞から人体のすべての細胞組織が生まれることになる。一言でいえば万能の方、可ならざるはない御方である。

神様でありながら死ぬこともお出来になった上、死から復活することもお出来になった方である。このような方から命に代えてまで愛されていたし、今も今後も愛され続けている

と知ったらどうしますか？

ぴったしとくつついてゆきたいと思いませんか？



信仰 雑感 (八)

首 藤 正 (前田)

一 われに甘し

家内を見ていると、よく働く。必ずしも体調が良いとはいえないのに、目を覚ましている限り、一時もじっとしてない。何もせず、手拱いている(てこまねいている)のが勿体ないというのが口癖。ポカンと無為に過ごすのが、性に合わないらしい。次から次へと、仕事を作つては勤しむ(いそしむ)風である。

働くのが趣味かと言いたくなるが、それを言うとも蓋もないので口にチャックをしているが、実際、働かずにはおれない日本国民性の※権化(ごんげ)を目の前に見ているようである。

よくしたもので、連れ合いの私は差し当たって何もすることがなくても、一向に苦にならない。無為自然体といつて良いくらいである。きっと自分は少数派であろうと、働き好きの周りを眺めては思ふのである。

幸い、そういう有り様(ありよう)を、表立って家内から咎

められたことはない。多分、諦め半分、許容半分といったところか。

※ある抽象的な特質が、具体的な姿をとって現れたかのように思える人や物

二 ヘリコプター

家近くを、彼此(かれこれ)数メートル幅の川が流れている。六月初め、ホテルが散見して目を樂します。小魚もいるし、鯉も見かけたことがあった。時々驚(さぎ)が飛来して、V字型に降下しては去って行く。心なしか後ろ姿は優美。抃げた羽の大ききの割に何の音もさせない。カラスはちよつと違う。不協和音の羽音を撒き散らしたら頭上をかすめていく。

一体に鳥たちは音無しの構えだ。

蝶も雀もトンボも驚(わし)に至るまで、飛んで行くのに然したる(さしたる)音を立てない。例外は蜂と蚊とカラスくらいのものだ。

神様のお造りになった空を飛ぶ動物たちが、軒並み羽の大きき並みの音を立てたらどうなるのか。年がら年中、空がカミナリよろしくゴロゴロ鳴り渡って、地上の平和が乱されること疑いなし。絶妙の構造と機能を羽に具えて(そなえて)くださったおかげで、見る楽しみはあつても、耳を塞ぐ煩いから免れさせていただいているのではあるまいか。

三 視向

教会を出て、駐車場へ向かおうとしていたら、そばの御婦人から「お花が綺麗ですね」と同意を求められた。えっ、と思つて足許を見ると、なるほど今の季節の花たちがいた。

紫の紫陽花（あじさい）がずらつと並んでいる。

全く見ていなかったのである。

そういえば、有志の方がよくここでお手入れなさつていた。その成果である。

「心、そこにあらざれば、見れども見えず」であつた。

「見る目がなければ、見えないものですね」と反省の弁を口にしながら、歩きながら鑑賞の目を放つたのであるが、人に気付かされないと、自分の目は外に向かないと、今更悟つた一件である。

内向きについた目

外界が見えていながら、実は内の方を見ているから、心のスクリーンに氣を取られるのである。

「見ているが実は見えないという罪」を想つた。

四 天と地と

「去る者、日に疎し（うとし）」と云う。

悲しいけれど、心理的事実である。

しかし、神様から御覧になつた場合どうであろつか、と時々

想う。『神様から心が離れて久しくなつた人間に対して、神様の方もどんな疎ましく思われて、ついには御見捨てになられるのか』と決めつけられるのか』という段になると「イエス」とはとても云えない氣がする。

一つは御言のせいであり、もひとつは自身の経験からきている。

「ひと度我に來たる者、我決して是を見捨てず」という、確か元訳（げんやく）の聖句があつた。

先の牧師先生の御愛用の聖言だつたと記憶する。この聖句を握つて、主の御胸に揺さぶりをかけておられた御姿を想い出す。

主にあつては、一年も千年もたいした違いはないはずと、失われた羊探し杖にしがみつかれたのであろうかと想いみるのである。

天と地の違いは確かに諺にも当て嵌るのだ。

五 再更改

年初、出血を伴う脳髓の病変のせいで、見える世界が変わつた。歪み（ひずみ）が生じたというのが、医師の見解である。

果たして歪みなのか、従来の視界の修正なのかどうか自信

は持てない。見えないプリズムが嵌め込まれた(はめこまれた)感じである。馴れるのに時間がかかりそうである。

見えるところが変われば、心も変わらざるを得ない。

一度バイブルによって見える世界が変わったのに、又又(またまた)駄目押しの変化である。ダブルチェンジを蒙った(こむった)わけだ。苦し紛れに、退院した途端に会う人、会う人がどの人も、良い男、良い女に見えて仕方がないと言って暮らしている。

そう言えば、コトバの創造力で、ホントにそうなるかもしれないと期待を大いに抱いている。俗に、ヒョータンから駒が出るのだ。

要するに、歓迎すべき事柄と捉え、例の「神の造り給いし物は、皆佳き物にして、感謝して受くる時、捨つ可き(すつべき)物なし」(第一テモテ四・四)と信じている。

六 VOICE

人は声を出す動物である。声を出し、声を聞き、たまには歌い、そして踊りもすること、人との交わりを持った。原初以来ずっと。

読んだり、書いたり、ずっとずっと後のことだ。グーテンベルグの活字印刷の発明で書物の洪水が始まり、人々は声

を介さずに、文字という記号で想いを伝えることを覚えた。

声帯は何のためにあるか。大きな働きの一つは、想いを声に乗せて、目指す相手に届けることではあるまいか。書物は飽く迄もその代用物の位置にあった筈。本来は声の役目であるのに、書物の普及につれて、数は力なりと取って代わり、声なき文字の方が支配力行使するに至っている。観が、無きにしもあらずとなった。今や、公的には声抜き文書の物が物を言う有様である。生の声の相対的位置は随分と低い。復権運動を起こしたいくらいである。

生の声を聞けば、何年経っても瞬間的に本人の声と分かる。声は人格の代名詞ですらある。

七 急転

脳外科病棟に収容されている間、此の場所は長く居る所ではないと思いつけていた。

医師は丁寧、看護婦は卒がなく、看護助手も至れり尽くせりの世話をしてくれるが、「患者」対「治療サイド」という一方的関係から来る不平等性格下に置かれているストレスから一刻も早く脱したいもの、という欲求は消えなかった。

神様が、今は此処に居れと命じられていてと感じながら、自由への想いは、病棟の窓から見下ろす往来の人や車に触発

されて、憧れに似た色彩を増した。

思いの尽(まま)に歩き、車を駆れる人たちが、つくづく羨ましかった。自分に同じ自由の境遇が戻ってくるかどうか、何の保証もなかった。

失ったものは大きいと、哀惜の想いが湧く。

パラダイス・リゲインド(樂園回復)が、果たして自分にあるのだろうか。

まわる炎の剣が目に見えて仕方なかった。

突如、パレスチナへの自由の旅が始まった。

八 シンボリック・サイド

一番の贅沢は何もしないこと、というコマージュシャルの一句が耳に飛び込んできた。ある意味ではその通りである。

下手に手を入れると、余計悪くなる。

自分からは何もしないで、徹底して父の神の御旨に従ったイエス様は、最高に贅沢な生き方をなさったと言えまいか。

人の思惑はとことん無視して、人気取りの対極に立ち通されたということ。

人に褒められようと、くさされようと、私にはどうでも良いこと、ただ一つ、父の神様によしとされることのみを目標として生きる生き方は、本当の意味で自由で、なにものにも

も捉われない、独立独歩の人生といえる。

貧乏しようとしまいと、神様のくださるもので満足するし、感謝に溢れる心にあるのは、神様への崇めである献身の想いである。

これ以上贅沢な生き様は、又とあるまい。そのシンボルこそ十字架であろう。

九 高見見物

専門バカというコトバがある。

専門家ほど、自分の経験外に出られない限界への指摘であろう。卑近な例でいうと、医師の常識は病人の非常識、病人の常識は医師の非常識といったくなるずれを、しばしば経験目撃して惘然とすることがある。

専門にのめり込み過ぎたため、外の世界が見えなくなっている※憾み(うらみ)なのである。

大学教育で一般教養修得を重視するのは、この反省から来ているに違いない。広くいえば、読書のすすめも又、同じ理由に基づくのだろう。生涯教育、又然りである。

見方はいくらかもあるとの、複眼思考の持ち主でないと、他人への接し方が偏ってしまうのである。※偏頗(へんぱ)一点張りじゃダメということである。

専門を突き詰め、突き抜けてゆくと、広い世界に躍り出るということも、あるいはあるかもしれない。問題は、そこへ行き着かない、中途半端に留まっていながら、※※※自足の手合いかも。

※不満に思われる点、もの足りなく感じる点

※※かたよっている様

※※※自分の状況に満足してしまっている人間のこと

十 私見（愚見）

聖書に登場する家庭に、理想的なのはまず見当たらない。どの家庭も、何かしら何かが欠けている。夫婦とても同じ。完全無欠にうまくいつているのは、表立ってはやはりないようだ。

良妻賢母の鑑と評価されている、かのサライ（第一ペテロ三・六）にしろ、思惑通りいかなかった腹いせに、亭主に※剣突（けんつく）を食らわせている。あの場面には、つい笑ってしまう。※※唯唯諾諾（いいたくたく）と、妻君の意向通りに事を計らったアブラハムに、「恐妻家」の後ろ姿をつい見てしまうのは行き過ぎだろうか。

ダビデに至っては、あんまり手を伸ば過ぎて、不覚にも足を取られた感なきを得ない。過ぎたるは猶及ばざるが如し。

敬虔過ぎて、カミさんに愛想を尽かされたヨブさんは、終り善ければすべて善しの結末を自身迎えたとはいえ、前期の家庭生活については、崩壊して跡形もなくなったわけである。

こう見てくると、理想は父と子と聖霊なる神様の御家庭にしか見れそうにないと思えてくるのだが。

※荒々しく邪険にしかりつけること

※※少しも逆らわずに言いなりになる様

十一 有聲考

祈る時、無言で祈る人が居るだろうか。

アブラハムの僕がメソポタミヤの井戸端で、イサクの嫁探しの首尾のために祈った時のような、胸中での声上げは、場所と場合の※よんどころない事情に迫られてのことで、いわば例外中の例外ケースであろう。

普通、肉声を口から出して、見えぬ神様にも、我が耳にも、ハッキリ聞こえるように祈るものであろう。

有聲の語りかけは、のつぴきならぬ定着性がある。一旦、口から出したものは元に戻らない。取り返しような不可逆性格を伴うのである。声に出さぬ話しかけは、言わなかったことにもできるアイマイサを持つ。目に物を言わすなんて、取りようによって、どうにでも取れる代物であろう。

心に信じて義とせられ、口に言い表して救われるとは、言明が完成成就をもたらすといっているに違いない。想うに聖書を朗読すると、恰も（あたかも）神様の肉声を聞く心地を覚えるのも、故なしとしないのである。

※そうするより仕方がない

十二 手遅れ

私が行動を起こすのを見て、慌てて追隨するケースが、家内の場合多い。私としては、その前にやってほしいのである。

一手先を見て手を打つか、事が起こってから辻褃合わせに走るのは、雲泥の違いがあるのである。

想像力の問題とよく私は言うが、事実を見ない先に、恰も見ているかの如く、心の目で見て、前以て対策を講ずることができるのを、あるいは「氣働きがある」というのかもしれない。よくいえば、先回りのできる想像力の持ち主のことである。

「見ぬものをまこととする」信仰と相通ずるといふか、パターンが酷似している。

神様は御親切にも呆れるくらい、前以て、かくすればかくなると、事細かに先回りして御説明くださっているから、信者は後追いで確認するだけに、終始するようなものだ。

けれど、次元と規模が桁外れなだけに、信仰と進行がない交ぜになるのかもしれない。

十三 まとめ

脳梗塞⇨脳拘束である。脳の働きの自由が奪われることを意味する。脳は体の司令塔であるから、出先の自由も奪われる。

私の場合、字が書けなくなった。

書こうとしても、グニャグニャになって、形をなさないのである。

図形関係がダメになった。形への認識にいびつを生じ、想い通りに字が形をなさない上、字の形そのものがアイマイとなった。作文どころではないのである。

その上、数への認識が空中分解して、殆ど※空空漠漠化（くうくうばくばく）した。

一時、茫然となり、自分がバカになったのではないかと疑った。

幸いというか、多分少量の出血のせいであろう、日にちが経つにつれて、僅かずつではあるが、症状に日差しが差し始めて、斑状（まだらじょう）に機能回復の兆しが見えてきたのである。

そして、五か月後の今（二〇一四年六月）、長い間書けなかった文章が、まるで憑き物が落ちたみたいに湧き出してきたのである。

※漠然としてとらえところがない様

十四 愚考

私は佛教でいう「出家」なるものをしたことがない。従って、その心境も又、想像の外（ほか）である。身はこの世にあつても、浮き世の※絆し（ほだし）から抜け出ている境地がどんなものか、見当もつかない。

一つは実物を知らないからでもあるが、歴史上の例でなら、文字の形で伝え聞く程度の人ならば、あることはあるし、例えば親鸞もその一人であるまいかと感ずる。

そうではあるが、佛僧が追及した理念の具現化に成功した実物は、文章で読む限り、意外に使徒パウロあたりに見出せそうなのである。つまり文字通り、「出家」の達成者を、使徒パウロの生き方に見ることができるのである。彼自身そう感じていたからこそ、※※口を極めて弟子たちに「私に倣え」と勧めたに違いない。

出家とは「肉を去る」、つまり、「靈に生きる」ということに他ならない。このことを可能にするためにこそ、主は来ら

れたのだ。

※人の心や行動の自由を縛るもの、自由をさまたげるもの

※言葉のありつたけを尽くす、あらゆる言い方をする

十五 浮き足

青春は晩年に来る。私の場合はそうだった。「だった」と過去の形にしなければならぬのが残念だが、渦中にあると気付かぬ性質上、仕方がない。御多分に洩れず、過ぐる拾年（じゅうねん）の我が心の軌跡を想うと、哀惜に耐えないものがある。孔子は最晩年を省察して「心の欲する所に従えども矩を踰えず（のりをこえず）」と豪語した。自分のしたいようにしても、いつも適当に振る舞えたというのである。

自己満足の至言であろうか、そこには神の要素がないから、要するに「肉の満足」だったわけだ。行き着くところは亡びだ。仕方ないことに、神無視が彼の立脚点だったからだ。

私の人生の大半は、孔子、孟子の支配下にあった。充滿する空気の如きを吸わずに済ますには、天上に昇るしかない道理だ。

天上に架かる梯子（はし）は導気管でもあった。

胸一杯に吸い続けた、至福の恵みの時でもあった。心なしか浮き足立っている。

十六 静寂

集会が終わり、潮が引くように諸兄弟が帰ってしまつて、人つ子一人いない会堂は、それまでのことがウソのように、しんと静まり返っている。さっきまでの熱い風は、一体、どこへ行つてしまったのか。かけらすらない。今ここにはなんにもない。

椅子があり、窓があり、消えた電燈はあるけれど、命のあるものは何一つない。

これは教会だろうか。

教会ではある。

でも教会といえるだろうか。

沖繩を訪ねた旅人が、「ここにはなんにもない。けれど、すべてがある」というのを聞いたことがある。改めて見直してみると、教会には十字架の他にはなんにもないことに気付く。十字架があるから教会なのだ。

そして信者にも、十字架只一つが頼みであるのだ。神様とイエス様と自分を繋ぐ、唯一のものこそ十字架。そして教会。そして、それが今此処にある。静まり返つてはいるけれど。

十七 得心

父の日祝いに、娘親子が手作りケーキ持参でやってきた。総勢四人。一挙に家中が賑やかになる。食事もそこそこに、孫たちは家中散らばつて、マンガを読んだり、バドミントンに興じたり、やたらと歓声の絶え間がない。

母娘は母娘で、梅酒作りや何らの話題で忙しそう。独り取り残されて、本日の主人公は俯いて（うつむいて）、黙々とベルトの修復に、とりあえずお茶を濁す体たらく。一段落ついて、帰心（きしん）に誘われてか、おみこしが上がる。

持参のケーキが入っていた空箱が目に入り、「おつ、そいつに滅多に來ない中二の孫娘用駄菓子、一様進呈を」と想い付く。

持ってきたよりか持ち帰りの方が重くなったと、いそいそと提げ帰る様子に、心も軽くなる。

父なる神様も、きつと同じような、倍する恵みの浴びせ返しをなさるに違いないと想い合われて、これあるかなと、何やら改めて得心が行った感じ。

十八 修行中

人は元来、神様に申し上げるべきところを、つい人の方へ言ってしまうことが多い。

「ありがとうございます。おかげさまで。」

「困っています。助けてください。」

「これとこれと、どちらの方がいいでしょうか。」

「スバシイ。実に見事です、御手前の絶妙なこと讃美の外ありません。」

などなど、なにかにつけてそう思うようになるにつれて、私はだんだんと人に対しては無口になっていった。

神様の方へ向くの忙しくて、人は構っておれなくなったという言い過ぎだが、例えば、連れ合い相手に喋っているも、ともすると会話が中断しがち。胸中でたえず神様へ向いてしまうからである。こここのところのバランスをとるのが、修練の要るところではある。

目下修行中、卒業（そつぎょう）はなさそうである。表立って人様におすすめ申し上げられそうにない。



オランダ・ベルギー・フランス旅行

正 野 眞 宏（前田）

昨年はアメリカ西部の大自然を見させていただいたが、今年には「美を巡るオランダ・ベルギー・フランス（モン・サン・ミッシェル、パリ）」のツアーを申し込んだ。いつも世界遺産人気の上位を占めるモン・サン・ミッシェルとオランダのチューリップが見たいという家内の希望である。「美を巡る」とは、中世期の有名な絵画や街並みが見られるというものである。こういう機会と行ける健康を与えてくださった主に感謝しつつ、例によって感じた印象を報告したいと思う。

期間は、平成二五年四月二五日から五月二日までの八日間。一国を二日で回る駆け足ツアーである。参加人員は三四名。中には毎年三、四回は海外へ行くという猛者もいる。八十を超える女性は、この日のために体を鍛えているとか。確かに歩きぶりは、私より確かである。

出発は福岡空港。オランダ航空がアムステルダムまでの直行便を開設したので、随分便利になった。大阪から来たツア

―は二か所で乗り換えたので、疲れ果てたと言っていた。

出発前に、ある方から「家の中は片付けない方がいい。きれいにしておく、何かあったら、やつぱり虫の知らせだったということになる」と言われた。これも縁起担ぎなのだろう。一般の人はこれを聞くと恐れるのかもしれないが、私達は主の許しなしには何事も起こらないと確信しているので、一切を主に委ねて出発した。

アムステルダムまでの飛行時間十一時間四五分は、やはり長い。エコノミーの席は狭く、身動きがままならない。まるで軟禁状態である。一応、本は持ち込んでも、頭がボーッとして頭に入らない。する事はトイレに行くことと機内食を食べるぐらいで、爆音で眠ることもできず、面白くない映画を見ていた（日本語のものは少ない）。時速千キロを超えるスピードで飛んでいるのだが、なかなか進まない。地球の大きさを改めて思う。ただ時の過ぎるのを、イヤホンから流れる音楽を聴きながら、ひたすら待つだけである。

私は思った、手術をするとき麻酔をして、気が付いたら終わっていたというが、飛行機に乗る時、希望者には麻酔注射をしてくれないかな、そうすればこの辛い時をやり過ごし、目が覚めたら、目的地だったということになるのだが……。そんな他愛もないことを考えたりしていた。

そんな辛さも、目的地に着くとケロリと忘れて、元気が出てくる。「喉もと過ぎれば、熱さ忘れる」である。いい意味でも、悪い意味でも、これがあるから生きて行けるのだろうし、海外旅行もまた行こうということになってしまうのである。

さて、アムステルダム空港からフランス・ドゴール空港へ乗り継ぐために空港内移動の途中で、入国審査があった。オランダに入国するわけでもないのに何故？と思ったが、流れのままに審査を受けて、パリ行きの飛行機に乗った。通算十三時間の長旅の末、やっとフランスに着いた。ここで入国審査があると思っていたら、何もなくて外に出られた。

私は不思議に思っただけで乗員さんに聞くと、ヨーロッパ連合（EU）は一つの国としているので、オランダからフランスに飛んだ飛行機は国内線扱いで、最初に着いたアムステルダム空港が入国となり、そこで入国審査が行われたのですと言われて、成程と納得した。

フランスからベルギーへ、ベルギーからオランダへバスで行っても、国境線がどこか分からないほど出入り自由である。通貨もユーロで統一されている。これは有り難いと思った。以前は厳重なチェックが行われ、通貨もその国のものに両替しなければならなかったが、その壁が取り払われたのである。

私はふと、天国のことを思った。以前、クリスマス祝会で「天国の門」という劇をしたが、天国に入る審査は厳しく、入れる人はほとんどいなかった。それがイエス様の十字架によつて高い壁は取り除かれ、信仰の切符さえ持っておれば、出入り自由となった。まさに福音である。



パリ・エッフェル塔をバックに
(首にしているのは説明用受信機)

パリは家内と旅行するようになって最初に来た所であり、二十数年ぶりである。エッフェル塔も凱旋門も、当時のままである。ルーブル美術館へ案内されたが、相変わらず、多くの人でこった返している。恐らく世界中から来ているのだろう。入るだけでも時間がかかるが、団体客は別ルートですぐに入れる。その分、料金が高いそうで、日本とは逆である。

ここはルイ十四世がヴェルサイユ宮殿に移るまで王宮としていた所で、ナポレオンが持ち帰った戦利品とルイ王朝のコレクションを展示するため美術館として改造し、オープンしたとのこと。建物を見るだけでも価値がある。館内は全長二十キロに及び、全てをじっくり見るには数カ月かかるらしい。とにかく広くて、一人では迷子になること請け合ひである。パンフレットで行こうとしても、なかなか辿りつけない。幸い現地ガイドさんが案内してくれ、しかも説明してくれるので、大いに助かる。主なものを短時間で見ることできるわけで、ツアー旅行の利点である。個人だと、こうは行かない。

代表的な物は、やはり「モナリザ」と「ミロのヴィーナス」であるが、どちらも人だかりで、近づくことさえできない。特にレオナルドダVINチの「モナリザ」の前はすごかった。あの何とも言えぬ微笑が、これだけ多くの人を惹きつけるのだろうが、たかだか人が書いた絵ではないか、畏れ多くも私は神が造つてくださった作品であるぞと思ったが、どうも吸引力は私の負けである。私が微笑しても、だれも振り向いてはくれない。モナリザの売値は分からないが、数十億円、いや百億円ぐらいにはなるのではないか。すると、私の売値はいくら？ いやいや誰も買つてはくれない。しかも老いばれ。こち

らが金を払っても、貰ってくれる人もいないだろう。この点でも勝負にならない。しかし、と考える。そうじゃない。私を買い取ってくださった方がおられる。しかも、御子の血をもつてである。お金に換算することはできないが、宇宙をもつてしても代え難いものである。そして、「あなたはわが目に尊く、重んぜられる者、私はあなたを愛するがゆえに、あなたの代わりに人を与え、あなたの命の代わりに民を与える」(イザヤ四三・四)と言われているではないか。VIP扱いという言葉は、この御言から来ていると聞いたが、モナリザが海外へ行く時はそれこそVIP扱いであろうし、私はエコノミークラスであるが、そんな事はどうでもよい。私は神からVIP扱いを受けている、これ以上ものはない、そんな事を思うとうれしくなった。絵心のない者の感想である。

ループル見学の後は自由時間ということで、家内の希望でオランジュリー美術館へ行く。ここはフランス革命でマリイ・アントワネットが処刑されたコンコルド広場に隣接した国立公園内にあり、ルノアール等の絵画のほか、モネが最後に描いたという睡蓮の絵が大きな部屋の四方向いっぱいに飾られていたのを見たいという。この絵のために美術館を改装したとのことである。次の日、モン・サン・ミッシェルへ行く途中、モネが生涯を過ごし、ここで制作した睡蓮の池と庭

園を見たので、より一層、印象深いものとなった。

モン・サン・ミッシェルは北フランス、ドーバー海峡に面したノルマンディ地方にある。ノルマンディと言えば、第二次世界大戦で連合軍がここに上陸し、ドイツ軍を追い詰めた激戦地として有名である。ノルマンディとは「北からの人」という意味で、北欧のバイキングが度々ここを襲って困らせたので、彼らにこの土地を与えて住まわせたのが始まりだという。辺りは見渡す限りの牧草地と菜の花畑が続いている。

そして、大西洋に出た所に、モン・サン・ミッシェルが姿を現わす。修道院というより、要塞を思わせる。モン・サン・ミッシェルとは、「聖ミカエルの山」という意味で、西暦七八年にオベールという修道士が天使ミカエルからこの岩の島に修道院を建てよと夢で御告げを受けたが、最初は信じられなかった。しかし三度も同じ事があって、これは御旨と悟り、ベネディクト会の修道院として建て始めたのが始まりという。その後、何度かの増築によって十三世紀に今の姿となり、カトリックの聖地として多くの巡礼者が集まって来た。フランス革命時に廃止され、一八六五年まで牢獄として使用されたとのことである。現在は修道院として復元され、年間三百万人が訪れるという一大観光地である。

ここは干満の差が十数メートルと大きく、干潮時は干潟になつて行き来できるが(今は道が設けられている)、満ち引きが速いため、島に帰る途中で溺れ死んだ修道士が後を絶たなかったという。



モン・サン・ミッシェル

建物はゴシック様式で、極めてシンプルである。都市部にある豪華な教会とは異なり、装飾物はほとんどなく、暗い感じがする。岩山の上に建てられた事もあって、間取りが複雑で高低差が大きい。かつては六十人ほどの修道士がここで質素な生活をしながら、祈りの日々を送っていたという。こんな不便な所で、しかも厳しい生活を自ら課して、神を求めた

修道士たちの苦労が偲ばれるのである。同時に、そうまでしなくても、今は聖霊によつて神の奥義まで教えてくださる時代となっているのになあ、と思ったりした。

その日はモン・サン・ミッシェルが見える民宿に泊まり、ライトアップされた幽玄な姿や朝日に映える様子を見ることができたが、無茶苦茶寒かったことだけが記憶にある。

次の日は国境を越えて、ベルギーへ行く。途中でセーヌ川沿いのルーアンという町を通ったが、ここはジャンヌ・ダルクの処刑地として知られている。車中でジャンヌ・ダルクの生涯が語られたが、もともとカトリック信仰に疑問を持っていることもあって、当時のローマカトリックの横暴さに腹が立ってしまった。

ベルギー最初の訪問地は、水の都と言われるブルージュである。ここは十二〜十三世紀に北海へ続く運河を利用して貿易が栄え、その繁栄期に造られた美しい中世の街並みは、歴史地区として世界遺産に登録されている。特にマルクト広場はヨーロッパの中でも美しいと言われるもので、まるで中世にタイムスリップしたような感覚となる。運河が縦横に流れ、白鳥が羽を休めている姿は、まさにメルヘンの世界である。水運貿易で栄えたブルージュであったが、陸地が広がって

海外線から遠くなったことにより衰退し、現在貿易の中心地は、アントワープに移っている。



ブルージュ・愛の湖

その日はブルージュに宿泊し、首都ブリュッセルへ行く。

ここはEUやNATOの本部が置かれ、世界の表舞台の都市であるが、街並みは中世期の面影を残していて、如何にもヨーロッパらしさを感じさせる。特にグランプラス広場(世界遺産)は十一、十二世紀に市場として開かれたもので、世界で最も美しいと称されとか。ギルドハウスや市役所など周囲の建物は当時のまま残っており、それは見事というほかない。

近くに、有名な小便小僧の像があるというので行ってみた。

一六一九年作とのことであるが、思いのほか小さく、しかも街の一角に設置されているので、見過ごしてしまいそうである。別名「ジュリアン君」というそうで、世界から七〇〇着以上の衣装が送られ、日本からも袴や兜、それに桃太郎の衣装もあるとか。

ブリュッセルを後にして、ベルギー第二の都市アントワープへ向かう。我々には小説「フランダーズの犬」で知っている街であるが、ここは港とダイヤモンド研磨と画家ルーベンスが有名である。

「フランダーズの犬」は英国の女性作家によって書かれたもので、少年ネロが愛するお爺さんが亡くなった後、愛犬パトラッシュと共にこのアントワープにある聖母大聖堂に来て、念願のルーベンスが描いた「キリスト昇架」と「キリスト降架」の絵を見ながら死ぬという、多くの人が涙した物語であるが、どうもベルギー人には気に食わないらしい。周りの人が苦勞しているネロに冷淡だったので死んだというのに反発し、自分達はそんな冷たい人間ではないというのが、その理由らしい。現にベルギー人はこの物語をあまり読まないとのこと。これだけの世界的名作であるから、通常であれば石像でも建てるところであるが、この物語が好きな日本人を代表

して、トヨタ自動車が大聖堂前の広場に小さな記念碑を遠慮気味に建てていた。

その聖母大聖堂に入って見る。まるで美術館ではないかと思ふぐらい、聖画が多い。入った正面の祭壇の上、一番目立つ所に、雲と御使に迎えられる聖母昇天の大きな絵があった。これもルーベンス作である。少年ネロが見たいと思つていた「キリストの昇架」はその左側に飾られていた。それは十字架に釘づけられ、まさにそれが立てられようとするイエス様の姿を生々しく描いて臨場感あふれるもので、しばらく動くことができなかった。



ルーベンスの「キリスト昇架」

もう一つの「キリストの降架」は聖母昇天の絵を挟んで反対側に掛けられ、イエス様が十字架から取り下ろされる絵で、

母マリヤと弟子のヨハネが悲しげな顔で遺体を受け取ろうとする姿を描いていた。

私はふと思った、カトリックではイエス様の十字架よりも聖書にも記されていないマリヤの昇天の方が大事なのかと。玄関に入って見えるのはマリヤの絵であつて、十字架の絵は柱に隠されて正面からは見えない。マリヤ昇天は、ドームの天井画にも描かれていた。

アントワープを後にして、**オランダのキンデルダイク**へ向かう。約一〇〇キロの道のりである。ここには有名な風車群（十九機）が残されて、最もオランダらしい所である。

オランダは、正式にはネーデルランドと言い、ベルギーと一国を成していたが、フランスから独立するとき、宗教の違いから別々になったという。ベルギーはカトリックであり、オランダはプロテスタント（カルビン派）で、生活は質素を旨とし、料理に至るまでベルギーとは違いがある。

オランダの人口は約千六百万人、国土の四分の一は海面より低い所にある。国土を広げるために干拓事業を行い、排水に風車を用いたという。地球温暖化による海水位上昇は国の存亡にかかわる重大問題ということで、自転車が多い理由の一つになっている。現在の排水はモーターで行うため、風車

は観光用に残されている。



キンデルダイクの風車群

キンデルダイクは辺り一面農地で、何もない。十五、十六世紀に建てられた古びた風車が立っているだけである。観光用に一機だけが風車を廻していた。のどかと言えばそうであるが、何となく寂しい風景に、一緒のツアーの人が、「ハウステンボスの方が、オランダらしくていい」と言ったという。それはそうかもしれない。風車のほかに運河があつて船を浮かべ、オランダらしい建物があり、チューリップの花を咲かせ、民族衣装を着たお嬢さんが往来すれば、それは凝縮されたオランダを満喫できるかもしれない。しかし、ここには風車以外には何もない。運河と畑があるだけである。人々はそそくさとバスへ帰つて行つたが、私はしばらく風車を眺め続

けた。農地を干拓し、これを守る苦労は並大抵ではない。何度も海水に犯されたに違いない。当時の人達の汗と涙が、この風車に沁み込んでいるように思えたからである。風車のレンガやコンクリート(恐らく補強したのだろう)は色褪せ、カビさえ生えて変色していた。風車の木組みも朽ちかけているようにも見える。お世辞にも美しいとは思えない。確かにハウステンボスの風車の方が新しくて、見栄えが良い。しかしそれは観光用であつて、見かけだけで生活は感じられない。この風車は古ぼけているが、人々の生活と今日のオランダを築いた歴史があり、教訓がある。私の足が動かなかった理由は、ここにあつた。

私はふと、私の信仰のことを思つた。私の信仰は果たして、ハウステンボスの風車のように見かけだけのものか、それとも生活の中で苦勞しながら主の言葉に一生懸命従うものであるか。「若い人の栄えはその力、老人の美しさはその白髪である」(箴言二十・二九)とあるが、この風車が当時の生活を語っているように、私の白髪は神に従う生活を証しするものとなっているか、ということである。願わくは、見栄えはなくても、主によつて「老人の美しさ」を輝かすものになりたいと思つた。

キンデルダイクを後にして、首都アムステルダムへ行く。ここはまさに運河の町である。縦横無尽に運河が人工的に張り巡らされている。早速、クルーズによる市内観光に出る。途中で、アンネ・フランクの家ですと放送されて、身を乗り出した。第二次世界大戦時、ナチスのユダヤ人迫害を避けて、家族と共に二年間隠れ住んだ家が目の前にある。私はぜひ入ってみたいと思ったが、残念ながら船中である。通り過ぎるほかなかった。どんな思いで日々を過ごしたのだろう。あまりにむごい運命に翻弄されて、若い命を奪われたのだ。知り合いの密告により、アウシュビッツへ送られたのだそうである。ここにも、極限状態の置かれた人間の罪と性(さが)を見るのである。

アムステルダムには国立博物館があり、青色で有名なフェルメールの絵や世界の三大絵画の一つと言われるレンブラントの「夜警」を見ることができた。実は私達が見た前日は、オランダ皇太子が国王となる戴冠式があり、この「夜警」が飾られた部屋で披露宴が開かれ、日本の皇太子ご夫妻も出席されていたのである。

オランダと言えば、チューリップを連想させるほど有名であるが、今回のツアーの目的の一つであるキューケンホフ公

園へ行く。ちょうど開花の時期で、八分咲きのチューリップやヒヤシンスが広い敷地に美しい造形を演出していた。ここの花を見るために、世界中から人が集まるのである。花の力を思わざるを得なかった。日本にもチューリップ園があり、花自体はそんなに変わりないと思うのだが、本場というか、オランダという舞台で見るチューリップは、また違ったものように見えた。この球根は、高価なものは百万円近くするそうである。物の価値とは、物そのものではなく、希少の度合いで決まるのだろうかと思った。



キューケンホフ公園のチューリップ

ここでの印象は、目を輝かせて見て回る家内に任せた方が

よさそうである。

今回のツアーは、自然というより、中世期の街並みや名画、そしてチュールリップという、いわば人の手によるものを中心であったが、それでも世界から人が見にくる魅力があったということである。それは人類の財産とも言うべきもので、私が見た全ては世界遺産となっており、大切に保存し、次代に伝えなければならぬものである。

しかし、と考える。人類が最も大切なものとして次代に伝えるべき最大のものは、神が私達に与えてくださったイエス様による福音ではないだろうか。もし地球上から聖書と教会、そしてこの信仰が途絶えたなら、再び主がこの御業を成されることはあり得ない。世界遺産を見ることはなくとも、人間は生きて行けるが、十字架による信仰以外には、罪の許しも救いはなく、真の平和も幸福もないと思うからである。

こんな事を考えながら、ツアーの報告を終わりたいと思う。

伝道師任命式における証し

隈 上 望 都

彼らがあなたがたを引き渡したとき、何をどう言おうかと心配しないがよい。言うべきことは、その時に授けられるからである。語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあつて語る父の霊である。

（マタイによる福音書十章十九〜二十節）

それゆえに、あなたがたは行つて、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によつて、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。

（マタイによる福音書二八章十九〜二十節）

皆様の祈りに覚えていただきました、私の神学校での生活が、この度無事に終了いたしました。三月七日に卒業式が執り行われ、卒業証書を受け取り、晴れて卒業することが出来

ました。三年間の学びが守られ、またこの様にして福岡に戻らせていただきました。皆様のお祈りに、また何よりそれに応えて下さった主に、心から感謝致します。

今から約三年前、つまり私が神学校に入学するにあたり、一つの目的・目標がありました。それは、神学校という様々な教団教派、年齢、信仰歴という背景の中からクリスチャンが集う場にあって、自分自身の信仰がどのようなものであるのかを知る、ということでした。「自分自身の信仰がどのようなものであるのか」。それまで全く考えたことが無かったのですが、私は神学校入学に当たり、その様な目標を持ったのです。

神学校における三年間の学びには、様々なカリキュラムが組まれています。その中で学校側が重きを置いている学びの一つに、「教会実習」という科目があります。その名の通り、神学校側が決めた教会に、神学生が実際に向いて、現場での奉仕実習をするというものです。この実習教会は、毎年度変わりますので、私は三年間で三つの教会で実習をしたことになります。

私が入学して、初めて遭わされた実習教会は、かの有名な芦屋市にあります、日本イエス・キリスト教団芦屋川教会という教会でした。そこで一年間、土日の奉仕を致しました。

初めての教団、初めての教会ということで、今まで知らなかった、様々なものを見聞きし、また経験しました。最初の頃は全てが新鮮でした。「ああ、こんな賛美があるんだ。こんな祈りがあるんだ。こんな礼拝プログラムがあるんだ。」と驚きの連続でした。けれどもそのような初めて尽くしの中で、私は大変楽しんで、実習することが出来ました。

一年生も終わりに近づき、この実習教会もこれで終わりという時期に、芦屋川教会の皆さんが、「一年間お疲れ様でした」ということで、私の壮行会を開いて下さいました。その壮行会の中で、芦屋川教会の牧師である木村先生が、一年間を振り返って思い出を語って下さいました。その冒頭が、「限上神学生の芦屋川教会での一年間は、食べる・歌う・笑う、この三つに尽きると思います。」とおっしゃったのです。「一年間を振り返ってそれですか！」と言って、皆で大笑いしました。そして自分でも、「ああ、まあそんな一年だったかなあ……。」と振り返った訳です。

けれどもよくよく思い返してみたところ、私が神学校に入學する前、教会献身をして、修養生としてこの大濠公園教会なり、八幡前田教会なりに居た時も、大体そんな毎日だったなあ、と思った訳です。福岡でも、北九州でも、そして芦屋でも、私は食べて、歌って、笑っていたんです。

その事を思った時に、「そうか、私はこの神学校に来て、初めての教会に遣わされたけれども、そこで今までと変わらない生活を送る事が出来たんだ。」という事に気付かされました。それはただ単に、同じ事を繰り返していたという事ではなく、場所や教会は変わっても、私が変わらずに居る事が出来た。それは取りも直さず、私の心の内に平安があった、私の信仰が守られたという事なのだと気付かされたのです。その時、一年間信仰が守られたと言う事に、大変感謝をした私ではあったのですが、果たしてその信仰自体がどういふものなのかということには、考えが及んでいませんでした。単純に、今まで通り、楽しく過ごした一年間だったのです。

けれどもその後、二年、三年と学年が進んでいく中において、私の心の内から、初めにあった楽しさや平安や、喜びや感謝が無くなってしまったのです。それは、最初の一年では気付かなかった、見えなかった、周囲の人達の生活や、信仰姿勢が目に入るようになってしまったからです。「何か、自分とは違う。」そのような思いからくる違和感は、次第に大きくなっていき、私はそれらを受け止めきれなくなっていききました。

また、学年が上がるにつれて、下級生の指導にあたらなければならぬという決まり事も、私にとって大変なストレス

でした。「こんなに心が平安でない、喜びでない状態で、私は何を言う事が出来るだろうか。いやそもそも、何か言わなくてはならないんだろうか。」そんな思いが膨らんでいきました。そのようにして迎えた三年生の二学期でした。神学校での生活は、常に同室者が決められます。学期毎に変わるルームメイトと共に、それぞれの学期を過ごします。ですから私は三年間で八人のルームメイトと共に生活した訳です。九人ではなく八人というのは、三年の最後の学期は、寮生の人数の関係で一人部屋になったからです。ですから三年生の二学期に同室になった方が、最後の同室者ということになります。

私の最後の同室者は、私より随分年下の方でした。そしてその方は、自身の性格について、一つの悩みを持っていました。それは、彼女の慎重な性格の故に、積極的になれないという事でした。何か物事を前にして、「これはした方が良いか？しない方が良いのかな？」と迷うと、しない方を選んでしまうという、消極的なところでした。そしてその事の故に、「またしてなかったじゃない。」と注意を受けてしまう。

彼女にしてみれば、言われる事は理解出来る。自分が消極的な事も分かっている。けれども中々自分を変えることが出来ない。これは大変大きなハードルです。そのような課題を前に、「じゃあ祈っていいこうね。」と言って、私たちの同室生

活は進んでいきました。共に祈り、時に涙を流し、恵みを分かち合う、そのような生活が続く中で、ある日彼女が大変喜びながら、部屋に帰ってきたのです。

彼女は翌週の教会学校のメッセージにあたっていました。聖書箇所は、有名な「放蕩息子」の記事です。放蕩息子の父親は、自分がまだ生きているのにも関わらず、遺産としてもらえる分を要求した息子に、望み通りの事をしてやった。また、その財産を使い果たして出戻って来た際、何も言わずに彼を受け入れた。息子自身は、自分の愚かさ故に、もう到底息子としては受け入れてもらえないと思っていた。だからその家の使用人として働こうと覚悟を決めて戻ってきた。けれども父親は、彼を使用人としてではなく、息子として受け入れた。彼が使用人としての働きを全うしたからではなく、彼が戻ってきたという、そのこと自体を受け入れたのです。

彼女はこの箇所から、どのようにみことばを取次ぐかと準備している最中でした。その中で彼女は、この放蕩息子と自分の姿が重なったというのです。「私は足りない所が沢山あつて、そうと分かつてもうする事も出来ずに居た。けれども私の足りない所が直ったからではなく、『私はこのように足りない者です』と祈る私の祈りが、神様に受け入れられた事が分かります。今回の事を通して、私、神様の愛を感じていま

す。私、神様の愛が分かります。」そう言って、喜びを分かち合ってくれました。

私はこの事が本当に嬉しくて、「それは本当に良かったね。本当に良い体験をしたね。」そう言いました。それは彼女がこの事を通して、まさに今、みことばを体感していると思ったからです。彼女がみことばを、聖書の中だけの事ではない、昔話ではない、たとえ話の中だけではない、まさに今、自分の身に起こっている事実として受け止めていると感じたからです。「今まで言われてきた、自分自身の足りない事、出来ない事、変わらない事、それを受け止めるのはとても苦しいことだったね。だけどその事を通して、みことばを自分のものにする事が出来た。辛い思いもしたけれど、そのことによって、あなたはこのみことばを通して、神様の愛を、確信をもって語る事が出来るね。」私は彼女にそう言い、共にこの神様の成して下さった大いなる恵みを喜びました。

それと同時に、私は彼女に言った自分自身の言葉にハッとさせられたのです。「ああそうだ。私たちは、みことばを体験し、そしてそれを語るために召されているんだ。」

神学校の様々な授業は、聖書の色々な事を教えてくれます。この記事がどの時代に、どのような背景の中で、どのような人に書かれたのか。授業を通してそのような事を学ぶのは、

一つの大きな恵みです。しかしそれらを知っただけでは、みことばを語ることが出来ないのです。けれども神様は、このようにして折に適った体験を通して、みことばが正に、今自分自身に働いている事を教えて下さる。そしてそれを体験した者こそが、与えられたみことばを、確信を持って語る事が出来る。

私たちが置かれている日常の生活は、決して易しい事ばかりではない。時には逃げ出したいような、避けて通りたいような、見過ごしてしまいたいような様々な事がある。けれどもそういった経験を通して、神様は私たちに、みことばを語ってくださり、そのみことばを体験させてくださり、そしてそのみことばを語るようにと、私たちを押し出してください。彼女とのやり取りの中で、私は自分自身の信じるものが何であるのかを確認する時が与えられ、またそれを告白することが出来たのです。

みことばを語るために召されている私たち伝道者は、いよいよ多くの事を経験しなければならぬかもしれない。それは決して、容易い事ばかりではないかもしれない。しかしそれは、私たちがみことばを語るために、どうしても必要な事なのだ、そう確信させていただきました。

また、卒業式の前日でしたが、私は神学校でお世話になっ

た先生方一人一人に、ご挨拶をしに行きました。その中で、以前この教会にも来られた、学監の先生の所にもお伺いしたのです。その際私は何を思ったか、「先生、私の学校で三年間学んできましたけれど、神学というものが何なのか、未だに分かってないと思います。『神学的に考える』というやつが、未だに苦手です。」と言ってしまいました。それに対して先生は、「あなたを教えてきて思ったのは、あなたは授業で教えられる、いわゆる神学的な事を、いつも日常におとして考えていた。今置かれている状況や問題といった現実を見ていた。僕は神学ってそれで良いと思う。」そう言うってくださいました。それを聞いた時に、「ああ、私はこの神学校において、みことばを体験すること、みことばを体現すること、実際の生活の中でみことばに生きていく事をさせていただくことが出来たんだ。一つの証しを立てさせていただいたんだ。」と大変感謝致しました。

最初にお読みした聖書箇所。一つ目は、イエス様が弟子達を最初の伝道に遣わす際にお与えになったことばです。

彼らがあなたがたを引き渡したとき、何をどう言おうかと心配しないがよい。言うべきことは、その時に授けられるからである。語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中

にあつて語る父の靈である。

(マタイによる福音書十章十九、二十節)

まだイエス様との生活を、それ程長く送っていなかった弟子達にとつて、最初の派遣は分らないことだらけだったと思います。けれどもイエス様はそのような弟子達に対して、「色々考えなくても良い。その時々々に与えられる、御靈の導きに従いなさい。」とおっしゃったのです。

私の神学校への派遣も、まさにこのようであつたのだと思います。何も分らないままの入学でした。入学試験なるものもありましたが、どれほど出来ていたのかも分かりません。実際に入学してみても分らないことは沢山ありました。

色々な信仰を見る中で、理解できないと思うことも沢山ありました。しかしその分らない中に、折に適つた御靈の導きがあり、それによる恵みがあり、また分かち合う時が与えられた。その様な、分らない者へ、神さまが常に働きかけてくださる事を知るための派遣であつたと感じています。

そして今、私はこの後にもたれます、伝道師任命・派遣式をもつて、もう一度遣わされようとしています。それに際して与えられている聖書箇所が、二つ目の御言葉です。

それゆえに、あなたがたは行つて、すべての国民を弟子として、父と子と聖靈との名によつて、彼らにバプテスマを施

し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。

(マタイによる福音書二八章十九、二十節)

イエス様からの二度目の派遣の言葉です。イエス様が弟子達と共に生活なさつた三年半の歩み。その中でイエス様が彼らに教えられたのは、御言葉に生きるということだったのではないでしょうか。

ただ単に御言葉を説く人々であるならば、その当時でも既に存在していた。神殿に仕える人々がそのようなことはもうしていた。しかしもうそれだけでは不十分だった。「あなたたちは生活の中で、御言葉を生きたものとして獲得し、それに従つて歩むことが求められているのだ。そしてそれは、私と共に歩んだこの三年半の中で、あなたがたは常々言い表してきたことだ。それだから、あなたがたは全世界に出て行つて、この教えを宣べ伝えなさい。」イエス様は、そう言っておられるのではないのでしょうか。

私の神学校での生活も、弟子達がイエス様と共に歩んだ期間と同じく、約三年間でした。その生活の中で、イエス様は私にも等しく、御言葉に生きるとはどういうことを、語り続けてくださいました。

御言葉に生きるとはということか、御言葉を語るとはどういうことか、御言葉を体現するとはどういうことか、主の証人とはどういうことか……。イエス様はそれらのことを、実生活を通して教え続けてくださいました。

今この所から新たに遣わされるに当たり、イエス様のこの教えを、またこの御言葉に生きるという信仰への招きを、大変強く感じています。この招きに応じて、御言葉に全身全霊で従い、またその恵みを分かち合わせていただきたい。そして今も生きておられ、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」とおっしゃってください、主の証人として、この方に生涯の全てをお献げいたします。

今ようやく始まるうとしている、この者の伝道者としての生涯が、全身全霊をもって御言葉に従い続けるものであるように。聖書一卷に命をかけて歩み続けるものであるように。常に御言葉を味わい、今も生きておられるこの方の御言葉が、私に働いたように、あなたにも働くのだと、確信をもって語ることが出来るように、主の整えを求め、共に祈っていただきたいと願います。



八幡前田教会年表

二〇一〇(平成二二年)～二〇一三(平成二五年)

(二〇〇七～二〇一〇年三月は三五号に掲載)

三月二十日

坂本達也さん、飯田恵姉結婚式

(福岡大濠公園教会にて)

四月 四日

イースター礼拝

十九日

川越シジエ姉召天

二十九日

八幡前田教会創立七十周年感謝記念礼拝

(二〇〇九年十一月に七十周年を迎える)

五月

松本孝枝姉、日本キリスト教団鍛冶町教会より転会

「ぶどうの木」第三五号発行

講壇横和室改装工事

戸畑教会の方々が諸集會に参加

教会学校一日お楽しみ会、親睦会

伊規須太郎師、パレス八幡に入所

榎本和義牧師、名古屋一麦教会特別伝道會にてご用

(二一日まで)

○ あなたがたは、主イエス・キリストを着なさい。

(ローマ十三・十四)

(出エジプト三四・六)

○ わが義人は、信仰によって生きる。(ヘブル十・三八)

○ 主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、い

つくしみと、まこととの豊かなる神、

六月十四日

八月 三日

十月 九日

十一月四日

二月 二一日

二八日

二十九日

十二月

十二月

一月四～六日

新年聖會(榎本和義牧師)

二月

宇戸田由美子姉、ジャカルタ日本語教会より転会

二月二十日

門司浩兄(澄子姉のご主人)召天

三月十三日

森田清恵姉召天

金井由信牧師(金生栄子姉の父)召天

榎本利三郎牧師説教集「雲の柱、火の柱」第二巻発行

十二月十九日 クリスマス礼拝、祝会
二三日 燭火礼拝

二〇一一年(平成二三年)

- 神はわれらの避け所また力である。(詩篇四六・一)
○ 見よ、わたしは主である、すべて命ある者の神である。
わたしにできない事があるうか。(エレミヤ三二・二七)
○ イエス・キリストをいつも思っていないさい。
(第二テモテニ・八)

一月四〜六日 新年聖会(榎本和義牧師)

五日 大田邦子姉召天

四月 西山喜美子姉、日本福音ルーテル小国教会より転会

十七日 イースター礼拝

五月 「ぶどうの木」第三六号発行

七月 三日 深見果歩ちゃん献児式

八月 九日 教会学校一日お楽しみ会

十月十六日 山口優太くん献児式

十月二六日 石井二三子姉召天
十一月三日 召天者記念礼拝、合同記念会
十二月四日 一年の感謝会

二三日 燭火礼拝
二五日 クリスマス礼拝、祝会

二〇一二年(平成二四年)

- 今は主を求むべき時である。(ホセア十・一二)
○ あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、
おののいてはならない。(ヨシユア一・九)
○ 世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信じる者ではないか。
(第一ヨハネ五・五)

一月四〜六日 新年聖会(榎本和義牧師)

三月 六日 榎木文男兄召天

四月 「ぶどうの木」第三七号発行

一日 イースター礼拝

十二月 十二日 榎本利三郎師召天十周年記念会

二九日 洗礼式(植木賢一郎兄)福岡大濠公園教会にて

八月 七日 教会学校一日お楽しみ会
九月 七日 会堂外壁、屋根防水塗装工事

(十月八日まで)

十一月一日 召天者記念礼拝、合同記念会
十二月二日 一年の感謝会

二三日 クリスマス礼拝、祝会
二四日 燭火礼拝

五月 「ぶどうの木」第三八号発行

十三日 高木シヅエ姉召天

六月 十日 駐車場西側の門扉交換工事(二二日まで)

三十日 F E B Cキリスト教放送にて榎本和義牧師の
説教放送

七月 六日 澤田充さん、正野のぞみ姉結婚式

(福岡大濠公園教会にて)

木田徳次郎兄召天

教会学校一日お楽しみ会

森岡富栄姉召天

阿部ヒサノ姉(榎本文子姉の母)召天

光成清子姉召天

納骨堂補修・塗装工事(二三日まで)

召天者記念礼拝、合同記念会

一年の感謝会

クリスマス礼拝、祝会

燭火礼拝

正野友絆(ゆうき)くん献児式

二〇一三年(平成二五年)

○ 見よ、わたしは新しい事をなす。(イザヤ四三・十九)

○ キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。

(ガラテヤ二・二十)

○ わたしたちは、すでに神の子なのである。

(第一ヨハネ三・二)

一月 月一回の都城集会が月二回の都城礼拝となる

四〇六日 新年聖会(榎本和義牧師)

三月 七日 松崎正道兄召天

二四日 イースター礼拝



2014年 新年聖会 福岡大濠公園教会



2014年 新年聖会 八幡前田教会

編集後記

信仰とは、望んでいる事がらを確信し、

まだ見ていない事実を確認することである。

(ヘブル人への手紙十一章一節)

信仰とは何でしょうか。神様を信じ、また神様の為さり様を信じるということに他なりません。

神様を見る事が出来ない私達は、神様を信じながらも、時にその業を見落とし、また忘れてしまいやすいものです。しかし神様は私達に、言葉をもつてご自身を証しするという恵みを与えてくださいました。私達が、日々の生活の中で味わった神様の御業を、信仰を持って告白していく時、その恵みを確固たるものとして頂けるのです。

遅くなりましたが、今年も無事、ぶどうの木を発行することが出来ました。与えられた恵みをお分かち下さった、寄稿者の皆様にお礼を申し上げます。

この本を手にとられる皆様の上に、神様の豊かな祝福がありますように。(望)

発行 二〇一四年九月

発行者 福岡市中央区鳥飼二丁目二―二六

基督伝道隊 福岡大濠公園教会

牧師 榎本和義

発行所 基督伝道隊

福岡大濠公園教会

八幡前田教会

戸畑教会

印刷製本 北九州印刷株式会社